

第147回まちなかDialog×第345回公開サロン

《2025年7月 サロン in 富山（通算345回）報告》

\*\*\*\*\*

# 部活動改革のゆくえをさぐる

## —富山県の高校部活動調査を中心に—

\*\*\*\*\*

【日 時】2025年7月19日（土）14:00～17:00（終了後は近隣で懇親会）

【会 場】富山県民会館601号室（富山市新総曲輪4-18）およびオンライン（Zoom）

【テーマ】部活動改革のゆくえをさぐる—富山県の高校部活動調査を中心に

【登壇者】

橋 和徳（富山県高体連研究部・サッカー専門部・U-18 フットサルリーグ／富山中部高校教諭）

「富山県の高校部活動の現状と課題—富山県高体連研究部による調査結果からみえるもの」

中塚義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／元筑波大学附属高校教諭）

「高校の部活動で何ができるか—38年の定点観測からみえるもの」

佐伯仁史（NPO 法人富山スポーツコミュニケーションズ理事長／富山県立高校教諭） ※進行役

【参加者（9名）】◎はNPO会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外

＜対面（5名）＞

◎橋和徳（富山中部高校／NPO サロン 2002 理事）、◎中塚義実（NPO サロン 2002 理事長）、

佐伯仁史（富山雄峰高校／NPO 富山スポーツコミュニケーションズ理事長）、

石黒葉月（スポーツメンタルコーチ）、土田なお子（一社ス波波カルチャーハビネス）

＜オンライン（4名）＞

○内田光侶（PROUDERS 合同会社）、○嶋崎雅規（国際武道大学）、○長野いつき（音楽家）、

○宮城島清也（NPO 清水サッカー協会／庵原S C少年部）

【懇親会からの参加者】○辰巳義和（FC.TON 元代表）

【報告書作成】橋和徳、中塚義実ほか

【キーワード】部活動改革、地域移行、地域展開、高体連研究部、富山県、部活動調査、意識調査、筑波大学附属高校蹴球部、チームとクラブ、DUOリーグ、ユースリーグ、橋和徳、中塚義実

＜目 次＞

はじめに

I. プレゼンテーション①：橋和徳

富山県の高校部活動の現状と課題—富山県高体連研究部による調査結果からみえるもの

＜ディスカッション①＞

II. プレゼンテーション②：中塚義実

高校の部活動で何ができるか—38年の定点観測からみえるもの

＜ディスカッション②＞

## はじめに

佐伯：皆さんこんにちは。部活動改革について話をしようということで中塚さんと相談し、コーディネーターを務めます。NPO法人富山スポーツコミュニケーションの佐伯と申します。

ご案内にもありますように。いま中学校の部活動改革が進んでいます。それは遅かれ早かれ高校にもやってきます。国や行政がやってくれるのを待つだけでなく、我々が当事者意識を持って考え、話し合うことが大切です。情報交換が大事だということで今回の開催に至りました。

はじめに富山県立富山中部高校の橋先生、次に元筑波大学附属高校の中塚先生にお話をいただき、皆さんでいろんな意見を出し合えたらいいなと思っています。

イントロということで一つだけ話をさせていただきます。橋先生にご発表いただく富山県の調査研究ですが、その元となるような研究に2000年から2004年まで4年間取り組み、2004年度の福島県での全国高体連研究大会で発表させていただきました。助言者である大学の先生や、司会の秋田県高体連理事長から「部活動がクラブに移行するなんてあり得ないだろう」と怒られ気味にご講評いただいた記憶があります。20年経ったいま、このような状況になっています。では20年後、30年後はどうあるべきかを考えないといけないと、個人的に思っていたところです。

では中身に入りますが、その前に自己紹介を。まずは富山の会場参加者から。

橋：富山県立富山中部高校の教員の橋と申します。本日はよろしくお願ひします。富山県高体連で副理事長という立場です。富山県高体連研究部委員長を務めて2年目になります。昨年度の全国高体連研究大会で、富山県の部活動の現状調査の発表をさせていただいたので、その内容をもとに今日はお話をさせていただきます。

土田：(一社) スポポアカルチャーハピネスという団体で、スポーツ少年団やクラブ活動のサポートをしています。中学校の部活動が2026年には地域に切り替わるということで、大変なことになる前に対策を取らなきゃいけないということで動いています。

石黒：もとは中学校の教員でしたが5年前に退職し、いまはスポーツメンタルコーチをしています。県内の中学校や高校のチームにサポートに入らせていただいています。部活の費用が必要になってくるということで、業務委託でスポンサー獲得のための営業活動などもしております。

中塚：NPO法人サロン2002理事長の中塚です。スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”という“志”を掲げて活動しています。2014年からNPO法人化しましたが、前身の研究会は1997年度からずっとやっていて、月例サロンは今回が通算345回目となります。時々地方に出かける通称「出張サロン」を行い、全国各地の方々と意見交換しています。今日はこういう場を、佐伯さんと連携して設けることができ、とてもうれしく思います。しかし富山って、もうちょっと涼しいのかなと思ったら、とんでもないですね。部屋の中は冷房が効いていますが、外は35度ぐらいでしょうか。皆さんと良い時間が過ごせたらなと思います。

全国にサロン2002の仲間がいて「サロンファミリー」と呼んでいます。サロンファミリーはオンライン参加も受け入れています。ではオンライン参加のサロンファミリーの自己紹介を。

嶋崎：国際武道大学の嶋崎と申します。千葉の勝浦から参加です。大学では主に運動部活動の研究を進めていますが、10年前までは東京の帝京高校でラグビー部の顧問をしていました。そのころ全国高体連研究部で中塚先生と一緒に活動させていただきました。今日は大学のオープンキャンパス

業務中なので、自己紹介が終わったら一旦退出させていただき、また戻ってきます。

長野：日本部活動学会で文化系部活動の立場で理事を務めます長野です。作曲を専門としています。以前からサロン2002の話は部活動学会理事会で中塚先生からお聞きしていましたが、この機会にと思って入会しました。本来は富山までお伺いしたかったのですが、残念ながら大阪の自宅からです。

内田：内田と申します。東京都豊島区の千歳橋中学校の女子サッカー部を地域移行するために、いま弊社が女子サッカークラブを豊島区で立ち上げようとしている段階です。富山での地域移行がどうなっているのか、どのようにすべきかなどを学ばせていただければと思います。業務の合間に参加していますが、学ばせていただきたいと思います。

宮城島：静岡市清水区から参加しています宮城島です。来月は「サロンin清水」を予定しています。所属はNPO法人清水サッカー協会がメインで、プライベートでは地元の少年サッカーチームの代表をしています。本業は静岡市役所の職員で、サロン2002には2002年のワールドカップの頃から参加させていただいております。地域クラブに関してはもう30年ぐらい前からいろいろ勉強したり、あるいは実際に活動したりしてきました。

## I. プレゼンテーション①：橋和徳

### 富山県の高校部活動の現状と課題－富山県高体連研究部による調査結果からみえるもの

#### 1. 問題意識と調査の概要

「部活動を取り巻く環境の変化～部活動顧問、部活動生徒間の意識調査～」というテーマで、2024年度全国高体連研究大会の第3分科会「部活動の活性化」で発表させていただきました。その内容をそのままお話しさせていただきますので、よろしくお願ひ致します。

この研究では、高校部活動を取り巻く環境がこの数年間でものすごく変化してきているところで、どのようなことが起こっているのかということと、部活動顧問や生徒がどんな意識を持っているのかということを調査しました。

富山県の人口は「昨年の10月時点で100万人を割り込んだ」というのが、大きなトピックになっていました。人口減少が加速しています。高等学校の現状をお話しすると、例えば令和5年度で全日制の高校が44校、定時制が5校、通信制が2校、特別支援学校が15校で、合わせて2万5930人の高校生がいることになっていますが、ここ10年間、年2%程度の減少を続けています。30年前の平成5年と比較すると、約2万3000人減っているということなので、およそ半減している状態になっています。それに合わせて高校再編も加速し、学級や学校が減少していくことが続き、教員の数も減っていくということで、働き方改革は待ったなしの状況となっています。今までの活動体制を維持できなくなっています。これはどこの都道府県でも起きていることだろうと思っています。

2024年11月の北日本新聞、富山のローカル紙の朝刊ですが、2038年度までに4割の高校を削減して、県立高校を20校に再編する方針が県教育委員会から出されたというショッキングな記事がありました。今後、学校がどうなっていくかというので、不安が募っているところです。

その中で部活動はどんな感じかというと、スポーツエキスパートと呼ばれる方や部活動指導員と呼ばれる方の派遣事業を増やして、学校の部活動の活性化を図っているところです。県教育委員会主導の事業で、令和5年度にはスポーツエキスパートと部活動指導員が合わせて165名、令和6年度には159名が配置されました。どちらも県費での配置です。運動部活動生徒のスポーツニーズへの対応、それからスポーツ専門性がないという先生方へのサポートにつながっているということになってています。

#### 部活動を取り巻く環境の変化

##### 富山県の高等学校の現状

令和5年度で全日制44校、定時制5校、通信制2校、特別支援学校15校で合わせて25,930人の生徒が在籍。  
⇒年2%程度の減少を続けている。  
⇒30年前の平成5年と比較すると、23,107人減少

☆高校再編が加速→学級や学校が減少していく  
☆教員の働き方改革も「待ったなし」

⇒今までの部活動の体制を  
維持できなくなっている。

#### 部活動を取り巻く環境の変化

##### 「スポーツエキスパート(SE)派遣事業」

##### 「部活動指導員」

令和5年度 165名 (SE135名・部指30名)  
令和6年度 159名 (SE128名・部指31名) を配置

⇒生徒のスポーツ指導ニーズへの対応  
スポーツ専門性の少ない教員のサポート

#### 中学校部活動の地域移行の現状

スポーツ庁による令和3年度実践研究委託自治体96のうち本県から3市1町が先行実践を実施  
令和5年度

⇒県内15市町村のうち、  
8市2町まで拡大している

富山県内の中学校部活動の地域移行の現状としては、スポーツ庁による令和3年度の実践研究委託自治体が96でしたが、本県からは3市1町が先行実践を実施しており、令和5年度では15市町村

のうち8市2町まで、今では15市町村すべてで進んでいるところまで来ています。

今日の午前中も、中塚理事長と一緒に高岡市の中学校のサッカーチーム活動がクラブ化している現状を見てきました。現場、現場の実情に応じて、そのような活動をされていることをリアルに感じてきたところです。

ちょうど2022年11月の北日本新聞の朝刊でも、今朝見てきたところが新聞で取り上げられており、いくつかの中学校の部活動が集まって1つのクラブになっているというような、部活動の地域移行が富山県内では進んできている感じになっています。世間でも、特に子育て世代からは、自分の子どもたちがどのようにスポーツに関わっていくかとか、あるいは放課後の過ごし方をどうしていけばいいのかというところに不安や悩みを持っておられて、大きな関心事なのかなというところです。1つの中学校だけでは部が成立しないところもたくさん出てきています。また、住んでいるところからクラブチームに通わせるにもなかなか難しいこともあります、さまざまなこと、教育だったり部活動だったりが変化していくことが求められているのだと思います。

富山県高体連研究部では、そもそも部活動の活性化って何?ということを議論してきましたが、答えは見つかりません。競技力が向上すれば活性化しているのか、部員数がたくさんいれば活性化しているのか、活動内容が充実すれば活性化しているのかなど、いろいろ話をしたのですが答えがわからないまま何をしようかと悩んでおりました。研究をどのように進めようかと思っていたときに、平成13年に発表された「地域スポーツクラブ、部活動」というテーマの発表がありました。今回のコーディネーターの佐伯先生が研究部でなされた研究で、平成13年から18年まで行われたアンケート調査です。ちょうど20年ぐらい経ったところで同じ質問項目を使ってやってみると面白いことがあるんじゃないかなということで、進めることにしました。

令和3年度調査では、県内の高校生の学校外クラブでの活動はどうなっているのかを調査しました。令和3年度時点では、部活動の地域移行や地域展開というのがそこまで浸透していなかった時期で、ここ3年で本当に進んできたと思いますが、様々な競技の高体連専門部委員長にアンケートを行いました。「すでに実施されている地域部活動的なものはありますか?」とか、「今後の地域部活動的な取り組み、アイデアはありますか?」といった記述式のアンケートです。専門委員長が記述式で答えられた内容はそれぞれだったので、方向性や傾向があるかはわかりませんでした。

令和4年には、実際にどれくらい参加しているのかを数量的に調査する方向で進みました。例えばバドミントンや柔道は、人が多いので、何かそういう活動をしている裏があるのではないかということが想像されました。合わせて、「クラブやスクールとして大会に参加していますか?」と聞いてみると、やはり何かの大会に出るため、例えば水泳やテニスのような競技では、インターハイは学校対抗なので学校に所属しないと出られないのですが、普段は学校外のスクールでやっているような子がたくさんいて、ほとんどそうなんじゃないかと思っていましたが、全回答の約42%にとどまり、約57%は「いいえ」ということでした。技能の向上や楽しみのためなど、さまざまな目的で学校外クラブに参加している高校生がいるのだろうというところまでは、このアンケートで見えてきました。

そこで、これらの状況を踏まえ、令和5年にはどんなアンケート項目を作って調査研究をするかを検討し、令和6年度にアンケート調査を実施しました。

令和6年度のアンケート調査の進め方です。佐伯先生がされたときには紙ベースの質問紙調査だったと思いますが、時代が経過しICT教育も進んだ状況で、Googleフォームが教員も生徒も馴染みのあるような状況でしたので、より多くの回答数を集められるのではということで活用しました。教職員向けと生徒向けのアンケートに分けて質問を作って調査しました。

教職員向けは学校によって違いますが、学校内の「公務用電子掲示板」に投稿していただき、生徒向けには、Microsoft TeamsやGoogleクラスマップのお知らせに投稿していただくように、各学校に依頼しました。できるだけ投稿者や回答者の負担にはしたくなかったので、事前に県校長会の方に、高体連会長や研究部部長から、高体連加盟校の校長に説明をして同意を得るようにしました。

実施期間については昨年の6~7月の1ヵ月で行うことになりました。回答は部活動加入者、運動部顧問だけからではなく、文化部活動加入者や文化部活動顧問、部活動未加入であるとか、部活顧問をしていないという方にも回答してもらうようにしました。回答数が教職員から686人、生徒からは1万人近くの回答を得ることができました。それなりに回答結果に妥当性のあるような調査になったかなと思います。その後、アンケート調査の結果を検討しました。Googleフォームだと簡単に割合の検討ができるので、そういうものを見たり、クロス集計を行ったりしました。また、佐伯先生がされたアンケートの研究データと今回のデータを比較してみることで、部活動を取り巻く環境が変わってきていくのではないかとか、そういうものが見えるのではないかなと思って見てみました。

令和6年度アンケート調査	
① 実施方法	Googleフォームにより、 選択式・自由記述回答方式アンケートに回答
	アンケート依頼文を各校連盟理事(保健体育科主任)に メールにて送付
教職員	校務用電子掲示板に アンケート調査依頼の 文面を掲載してもらい、 その文面よりアンケートに回答した。
生徒	教育用ICTプラットフォーム ( Microsoft Teams, Google Classroom等)にアンケート調査依頼の文面を掲載してもらい、その文面よりアンケートに回答した。
※アンケート調査実施に際しては、本県校長会で事前に実施についての説明を高体連会長・研究部部長から加盟校校長に行い、同意を得て進めることとした。	
② 実施時期	令和6年6月14日(金)~7月19日(金) およそ1か月間
③ 対象者	富山県高等学校体育連盟に加盟している 高等学校および特別支援学校高等部の 生徒ならびに教職員
※運動部活動加入者や運動部活動顧問に限定していない 文化部活動加入者や文化部活動顧問 部活動未加入者、部活動顧問でない方も回答した。	
④ 回答数	教職員 686名 生徒 9,891名

## 2. 調査結果と考察

### 1) 教職員対象調査

では、アンケート調査結果を見てみます。教職員の回答結果です。回答者の属性は年齢、性別、担当教科を見てみました。年齢は、20代から60代まで満遍なく回答がありました。性別に関しても、割合だけ見ると男性の方が多いのですが、富山県の高校教職員の男女比がだいたいこんなものだと思うので、それと比しても大差はないという結果でした。次に担当教科を見てみると、さまざまな教科から回答を得ました。保健体育の先生からはたくさん回答をいただきましたが、国語や数学、英語、音楽、あとは職業科先生や特別支援の先生からもたくさん回答をいただきました。大変ありがたい調査になったと思っています。

次に部活動とのかかわりについて見てみると、運動部顧問の回答が500人ぐらいで、文化部顧問が165人、部活動顧問をしてない方からも回答がありました。教頭先生などの管理職の先生からも回答していただけたので、こういう形になりました。

「部活動顧問にどうしてなったのですか?」という質問に対しては、圧倒的に「学校で割り振られたから」という、前向きじゃないような回答が多かったです。その次に多かったのが、「種目の経験者だから」ということなので、割り振られつつも、それは経験者だから割り振られているという方がたまたまいるという状況で部活動が支えられていると、改めて見て取ることができました。部活動顧問がその運動種目などの経験者であることはたまたまであり、不確実性が高いなと改めて感じました。

「日本スポーツ協会の公認指導者資格を知っていますか?」という質問には、半数以上の方が「知らない」という回答でした。安全・安心に、指導力を持って指導していくことを担保するために指導者資格はあると思いますが、部活動の先生方はそのようなことは関係ありません。「役割としての顧問なだけだから」という感じで「必要ない」、そもそも「知らない」方が半分以上いるという状況に驚きました。この辺がもしかしたら「部活動の活性化」につながるポイントになるのかと見えました。

公認指導者資格を保持している方となると、知っている方からさらに少なくなり、約14%という結果

でした。「今後、取得や更新をしたいですか?」という質問に対する回答は、約21%まで増えていました。その回答を年齢とのクロス集計で見てみると、若手教員の方が「取得してみたい」という回答がありましたので、今後は若手教員の奮闘に期待というか、ぜひ仲間を増やしていきたいと私自身は思っているところです。

「あなたの顧問している部には教職員以外の外部指導者の方（スポーツエスパートや部活動指導員、部独自の指導員など）はいますか?」という質問には、202件が「いる」と回答されました。これは令和6年度のスポーツエキスパートと部活動指導員の配置数よりも上回っています。地域において部活動を支援する指導者が、公式の方以外にもいるのだろうという想像ができました。

それから、「外部指導者の方は日ス協の公認スポーツ指導者資格を保持していますか?」という質問には、仮説として「ほとんどが持っている」と思って質問したのですが、「持っている」という回答は約22%にとどまりました。文化部の指導員もいらっしゃるとは思いますが、理論と実践力を身につけた地域スポーツ指導者が富山でもっと増えていくことが、部活動の活性化のポイントとなるかと思いました。

次に、「部活動の指導は、部活動指導員等の外部指導者に依頼する方が良いと思いますか?」という質問をしました。昨今の部活動地域移行の情勢を見てみると、90%ぐらい「依頼する方が良い」「私たちは部活動指導から手を離したい」と思われる方が多いのかな、と思って質問したのですが、意外にも「依頼した方がよい」の回答は約50%にとどまりました。「依頼しなくてもよい」が多いのかと思ったら、5%でした。「どちらとも言えない」という回答が逆に半分ぐらいでした。なぜ「どちらとも言えない」のかについての記述を見てみると、「慎重に進めていくべき」という言葉でまとめられると考えました。「新しく外部の指導者が入ると、また余計ないざこざができるんじゃないかな」とか、「その方との指導の方針のすり合わせをする時間を、また新たに作らなきゃいけないんじゃないかな」とか、心配されることがたくさんある、ということが見えてきました。できるだけ時間をかけたくないということもあります。それが心配で預けられないということもあると思います。先ほどの指導者資格のことなども関係してくるかと思いました。

次に、「平日の部活動の長さや休日の部活動の長さは、今のままでよいか。長くしたいか、短くしたいか」については、「現状でよい」という回答が一番多くなりました。平日に比べれば、休日の部活動について時間は「もっと短くしたい」と回答する教職員が増加している、と見ることができました。当然、働き方改革の中では、休日の部活動の時間はどのようにかコントロールしたいと思うところが見えました。

「部活を指導していて、大変なことは何ですか?」については、教員としての業務との両立、他の業務を圧迫していると感じている教員が多いということでした。

「部活動指導がなかつたら、その空いた時間はどうしたいか」は、教材研究や校務分掌といった、教員本来の業務という回答が多数ありました。富山の先生たちは真面目だなあと思います。日曜日や土曜日にもそういう仕事をしたいという回答が多くありました。そもそも平日でも間に合ってないのだという回答がありました。当然、趣味とか家事育児というようなこともたくさんあり、家庭生活の充実も合わせて図りたいという切実な思いがあるのだということが見て取れました。

ここでまた新たなクエスチョンが出てきます。部活動指導への魅力を感じて教員を目指す人は、大学生においては増えているのか減っているのか。私が大学生の頃は、体育大学の学生はみな、部活動顧問になりたくて教員を目指す人が多かった印象があります。「部活動で自分のやってきたスポーツを指導したいという学生さんは減っているのか」は、いずれ調べてみたいと思ったところです。

教職員 部活動顧問経験者	教職員向けアンケートより まとめ①
Q. 部活動指導をしていて <b>大変なことは</b> 何ですか	・部活動顧問をしている理由 =単にその運動種目の経験者であること =教職員配置の都合で割り振られた ⇒ <b>技術指導に多くの労力を割くことはできない・・・</b> まして、 <b>休日の指導には大きな負担を感じる・・・</b>
「教員としての業務との両立」が517件(80.8%)と最多 ⇒他の業務を圧迫していると感じている	・スポーツ指導者資格を取りたいと考える人は少ない ⇒若手教員には積極的な方もいる。 ・技術指導には外部指導者の方がいてくださることは助かる。
Q. 部活動指導がなかったら、 <b>空いた時間をどのように使いたいですか</b>	Q. 部活動指導への魅力を感じて 教員を目指す人は減っているのだろうか・・・?

## 2) 生徒対象調査

続いて生徒のアンケート結果のまとめです。生徒は高校1年生から3年生まで、それぞれ30%台だったので回答者の偏りはなかったと言えます。男子、女子が半分ずつぐらいでした。

次に、部活動とのかかわりについての属性を聞きました。「高校入学前からずっと同じ部に所属している」「入学した時からずっと同じ部に所属している」などの選択肢を作りました。それらの中でも「部活動加入をしている生徒」を合わせると84.1%になったので、富山県の高校における生徒の部活動への加入率はすごく高い印象ですが、他の都道府県の状況も知ることができたらよいなと思います。部活動へのニーズはいまだなお高いものがあるという気はしています。

途中でやめた子に関して聞いてみました。総回答者の1割ほど（約1,000名）いたので、その生徒たちが「途中でなぜやめたのか」は、6~7月という調査時期が高校総体の県大会が終わった後だったので、いわゆる「引退」というのを理由に書いていました。1年生でやめた子は、学業が生活の負担になっているのは70件、2年生になるとさらに負担になって181件、3年生だと342件で、当然「受験が近づいてくる」という傾向が見られました。学業との両立に悩んでいると言っています。

「所属していない理由は？」と聞いたところ、「放課後や休日に活動するのが大変だから」、「学業を優先したいと思ったから」というのがたくさんありました。さらに「部活動をしていて大変なことは何ですか」という質問には、「学業との両立や活動時間が長い」、「他の部員との人間関係」が多く、ここでも「学業と部活動の両立に悩む」生徒が多いという結果になりました。このあたりにも部活動の活性化のキーワードポイントがあるのではと見ています。

地域スポーツクラブについても質問しました。地域スポーツクラブの定義は、学校外でスポーツをする場所とし、学校施設を使ってもいいのですが学校の部活動とは違うところですという説明を簡単にした上で選んでもらいました。「地域スポーツクラブはどんなクラブなら入りたいか」という質問には、「学校の友達と一緒に参加できる」という回答が、9,800件中6,000件ほど、60%以上がこのように回答しました。地域スポーツクラブに行って学校外の人と関わりたいというよりも、学校の仲間たちと一緒に活動ができるということが大事な要素なのだろうということが、この結果から想像できます。

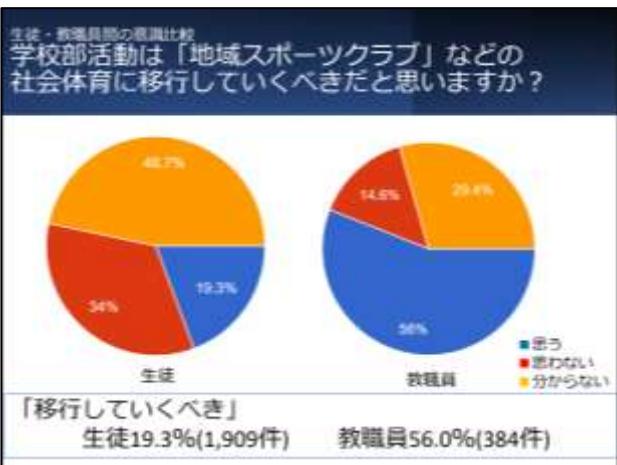
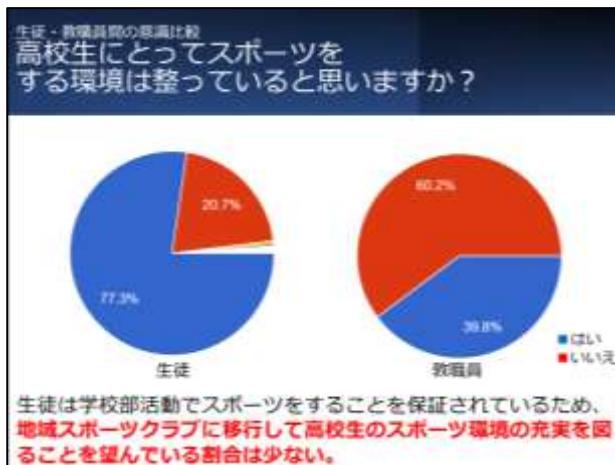
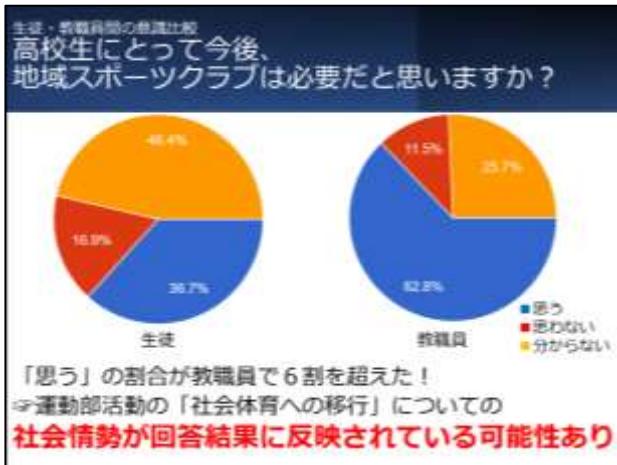
生徒のアンケートのまとめとしては、学業と部活動の両立というところに、うまくやれるような方策がないかなということ。学校の仲間との関わりを求めているということ。地域移行と言っていますが、部活動の形を変えなくても、こういうことが部活動を大切にしていけるヒントなのかなと思っています。

生徒向けアンケートより  
まとめ②

- ・学業だけでは得られない学校生活の充実について、部活動に加入して得ることを多くの生徒が志している。
- ・一方で、「**学業と部活動の両立**」に悩みを抱える生徒が多くいる。
- ・部活動で得たい充実とは「**学校の仲間との関わり**」であることが推測される。

⇒地域スポーツクラブに移行したとしても、**学校の仲間と関わること**を求めている。

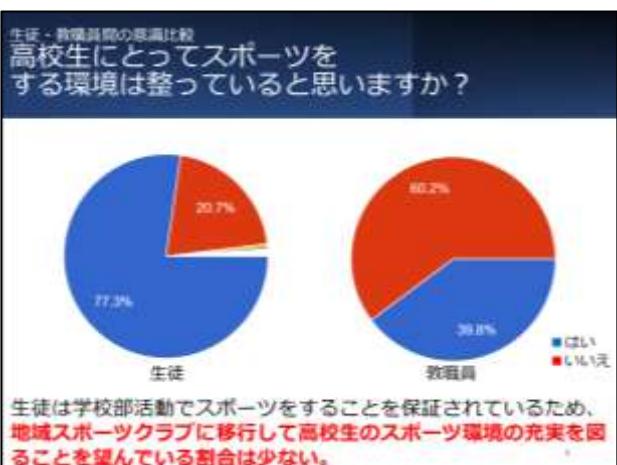
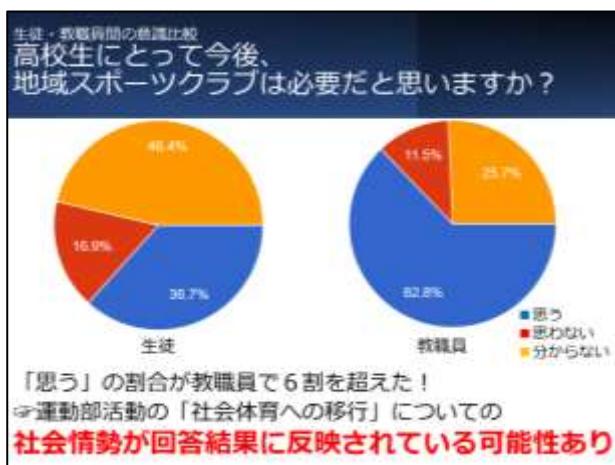
**＝部活動を大切にしていくヒントなのでは...？**



### 3) 生徒と教職員の比較

次に、生徒と教職員で、同じ項目で聞いたところがありますので、それらを比較してみました。

「高校生にとって今後、地域スポーツクラブは必要だと思いますか？」という質問に対して「必要だと思う」の回答は、教職員では約62%となり、地域移行の考えが、少しずつ浸透しているのがうかがえました。生徒の回答では、「必要だと思う」は約36%となり、教職員に比べると必要感を感じていない回答が多くなりました。



次に、「高校生にとってスポーツする環境は整っていると思いますか」。この項目は、佐伯先生が約

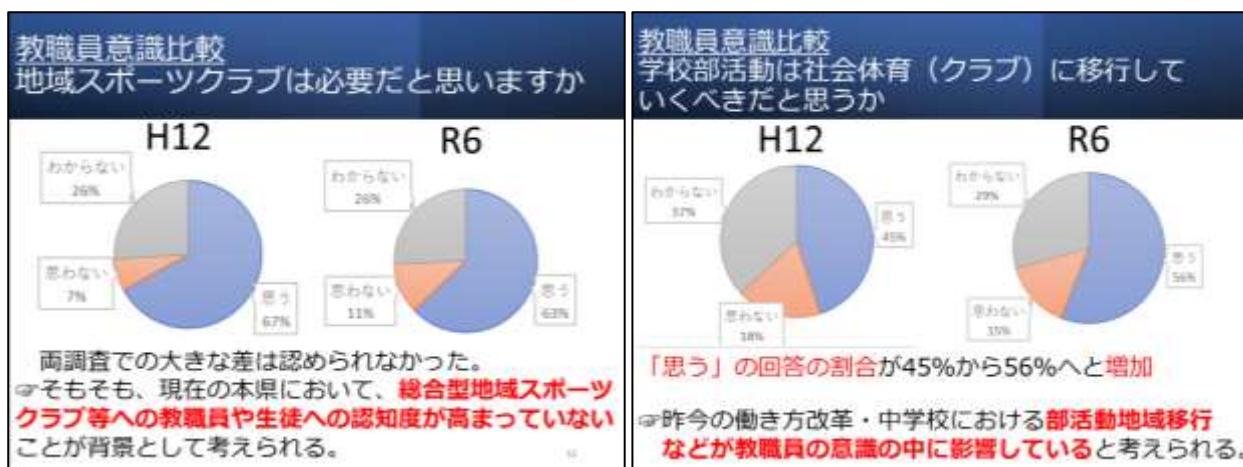
20年前にされたアンケート調査と同じ文言で聞いてみたのですが、令和6年の段階で教職員は、高校生のスポーツ環境をよりよくしたいという意識があるからか、「整っていると思わない」という回答が多いのですが、高校生はスポーツをする環境は整っていると回答した割合が8割弱までいるので、スポーツをする環境についてはそれほど困っていないという感じでした。今の状態を続けられたらいいなぐらいだと思います。スポーツとは競技スポーツなのかエンジョイスポーツなのかわかりませんが、今あるものをうまく活用していけるような方策があればいいと思いました。

「学校部活動は地域スポーツクラブなどの社会体育に移行していくべきだと思いますか?」という質問も、佐伯先生の研究と同じ項目ですが、教職員と生徒にはかなりギャップがあることが見て取れました。生徒は「部活動でいいや」というか、「部活動がいいや」という意識が多いと思います。部活の状況にそれほど不満を持っているわけではないという感じですね。「地域スポーツクラブが必要だと思われる理由は何ですか」と教職員に聞いたところ、自らの専門性と教員としての職務としての部活動の限界があるとか、専門性の高いコーチングを受けられるんじゃないか、というところで、遠慮したところや、しんどいなと思っている方が結構おられる感じでした。比較してみると、部活動の制度的・業務的な限界を、教職員側は感じている人が多く、高校生のうちにより多くの方と関わることで社会性を身につけてほしいという教職員の願いもある。高校生のスポーツ環境は「充実している」と生徒自身は思っているが、教職員はよりよくした方がよいという思いがある。社会体育に移行することについては、そのことを考える生徒は少ないというところで、部活動への不満もそれほど大きくなかった。むしろ部活動への魅力を感じている生徒がほとんどであるというのが、調査から見えました。

#### 4) 20年前の先行研究との比較

先行研究としての佐伯先生のアンケートとの比較をしてみました。

「地域スポーツクラブは必要だと思いますか?」というアンケートについて、令和6年と平成12年で、割合は見た通りそんなに変わらなかったというのが実情でした。



「資格や能力がある教職員は、スポーツクラブで子どもたちを支援していくべきか?」という質問について、割合ではあまり差が出なかったと見えますが、「思わない」と答えた方に対して「どうですか?」とお聞きした回答の中には、「教員としての本務に影響のない範囲でやってほしい」や、「学校業務に影響を及ぼしている学校外の活動をというのは、私たちの仕事も増えるしやめてほしい」という捉え方をされている方もいるという感じでした。20年前の学校の業務状況とは異なる中で、地域でのスポーツ指導などの活動で他の教員の業務にしわ寄せがくるようなことはやめてほしいという意見を持つ方は結構いるという感じでした。



「スポーツをする生徒は、どんな指導者に教わるべきだと思いますか？」という質問では、選択肢を10個ほどあげていたのですが、教職員の上位5項目は、順番の違いはあれ、H12年とR6年は同じものが上がってきました。特に「専門性・指導者資格を持った人」がいいのではというところがあります。教職員の意識には、「資格を持ってない教員」だと指導するのはよくないという考えがあるのだと思います。しかし生徒からは「楽しさを教えてくれる人」とか「プロコーチ」というようなニーズがあるという結果になりました。「専門的指導」を望む生徒も当然いますが、「楽しさ」を求める生徒が多いのが現状でした。

## 5)まとめ

総まとめになります。「部活動を活性化」するために、ということを導き出すのは難しいのですが、「人間性の成長を図る場にしてほしい」と思っている「教職員」と、「学校の仲間との時間を有意義に過ごしたい」、それを「続けられる環境をつくってほしい」という「生徒」の思いがすり合っていくことが大事かなということで、思いをマッチングさせる取り組みを、先生方も生徒たちもやっていけるようになっていけばいいと考えました。

まとめ 部活動の活性化を図るために 生徒と顧問の 意識のギャップを埋めていく	まとめ 部活動の活性化を図るために より高いレベルの 競技力の向上を目指すために
<p><b>週休日等の部活動の在り方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と教職員が一体となって計画していくことで合理化を図れる可能性がある</li> <li>大会カレンダーの見直し、参加大会の精選等</li> </ul> <p><b>生徒のニーズに応じた新しい部活動の形の模索</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学業との両立の不安を取り除く部活動の在り方（学習サポートも含む）</li> <li>学校の仲間と深くかかわり合える活動に</li> </ul>	<p><b>若手教員や地域部活動指導者の指導力の向上</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日入協公認指導者資格の取得を推進する財政的支援（補助制度等）や取得しやすくする職場環境の改善</li> </ul> <p><b>部活動指導員やスポーツエキスパートの より充実した配置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教職員&amp;生徒双方にメリットのある人材の活用・育成の促進</li> </ul>

そのためには意識のギャップというところで、「週休日等の部活動のあり方」は、先生から一方的にスケジュールや活動内容を「これだ」と決めてやっていくのではなく、これまで当たり前にされていた方もたくさんいらっしゃると思いますが、生徒と話し合いながら、「強くなるためにはこうじやなきやダメだ」ではなくて、「こういうふうにやりたい」という生徒の思いを尊重していくことも大事かなと感じました。

さらに、「大会のカレンダーの再検討」や「参加大会の精選」は、「部活動ガイドライン」でもあげ

られているですが、大事だなと思います。

それから、生徒のニーズに応じた新しい部活動の形ということで、「学業と部活動の両立」に対して、不安を取り除く方法はないかとか、「学校の仲間と深く関わり合える」ような活動にしていくということも大事かなということです。

さらには競技力の向上も含めて考えると、「指導力の向上」や「スポーツエキスパート、部活動指導員」がより充実した配置になっていくこと。先生方にも生徒にもメリットがあるような人材を活用したり、育成することもしていくといいのかなということが見えました。

からの発表は以上です。ありがとうございました。

### <ディスカッション①>

佐伯：いまの発表について、聞いてみたいことやご意見がありましたら、オンラインの方も含めて言っていただけたらと思いますがいかがでしょうか。

中塚：最後のところで出てきた「楽しさを教えてくれる人」というのは、どういうことを求めているのでしょうか。生徒たちは「楽しさ」という言葉をいろんなところで使うのだと思いますが。調査の分析で何か見えてきたことがあれば教えてほしいんですが。

土田：その関連です。私は柔道を教えているのですが、ある先生が一人の生徒を集中的に教えるんです。周りの生徒からすれば、その子に強くなってほしいから先生たちは一所懸命その子に対して教えるんだろうけれども、周りの生徒たちは一歩引いた目で見てるんです。あの子ばかりとかひいき目で見ているとか。子どもたちには、先生たちはこんな考えがあるんだよと伝えても、雰囲気がすでに楽しくないっていうのと、集中していろいろ指導されるその子自身が全然楽しくないって言うんです。なんで私はつっこみこななるのかって。教えてもらえるのはうれしい、強くなってほしい、期待も込めて教えるんだろうけれど、周りの目が気になって全然身にならないし、楽しく思えないということを聞いたことがあります。実際に私も見ていました。

1人に執着するのではなく、みんなで段階を踏んで、じゃあ次はあなたね、みたいな感じで教えてくれればいいんです。指導者の教えてあげたい気持ちもわかるのですが、指導者の圧が、生徒たちの温度差につながる。熱量が違うので、子どもたちも身に入らないので楽しくないと…。

佐伯：「楽しさ」ということに少し絞って意見交換しましょう。

橋：アンケート調査では、それ以上の分析はしていません。楽しさをどう捉えるかは、回答した人によるのだろうと思っています。FunなのかInterestなのか、それぞれ感じていることがあると思います。楽しくない、きついだけの活動は嫌だなと思っている子が多いのかなとは感じました。日常的に楽しくない経験をどこかでしているから、楽しさということが出てくるのかもしれません。何となく楽しくない場面していくつか出てくると思います。

佐伯：土田さんが言いたいのは、公平な機会を保証するべきだということでしょう。公平さが、楽しさの背景にはあり、偏りがあったら面白くないということだと思います。

石黒さん、メンタルコーチの立場からどうでしょう。

石黒：選手が感じる「楽しさ」って何だろうと考えていました。まず競技がうまくなる楽しさが最初にあるかと思います。その先に、このチームでやる楽しさ、このチームで達成していく楽しさがある

のではないでしょうか。先ほどのアンケートでも「同じ学校の仲間との関わり」というのがありましたが、本当にそうだなと、現場を見ていて思います。ただ、関わりのようすを現場で見ていて思うのは、選手同士でもコミュニケーションが取りにくいとか、指導者と生徒のコミュニケーションをどう取つたらいいのか、相手を理解するとか気持ちを伝えるとか、そういったところの難しさを感じている選手が結構いるなと思います。互いの関係性をつくっていけると、チームで勝っていく、達成していく楽しさを選手が感じるんじゃないでしょうか。

中塚：今日の午前中、橘さんと一緒に高岡市内の中学校の校庭でサッカーをやっているところをみてきました。個々の中学校ではサッカーチームが成り立たないので、高岡市立中学のサッカーチームをなくし、その代わりにいくつかの中学校が合同で「タカオカシティFC」という組織で活動しているところでした。

指導者との話の中で、楽しくないからやめた子の話がありました。タカオカシティじゃない別のクラブの話です。試合があるけれど、いつも同じ子ばかりが出る。練習はやっているし試合会場には行くけど試合に出られないから楽しくない。だからやめるという話でした。

ある特定の人にだけ指導が及ぶ偏ったトレーニングと同じように、せっかく練習をやっているのに、一番おもしろいはずのゲームの機会が奪われているのは楽しさを阻害しますよね。いまの話は中学の話ですけど、高校もあるかもしれません。誰もが等しく、とまでは言いませんが、やった分に応じたぐらいはゲームの機会が与えられるのは必須だろうと思います。楽しさの前提として。

そもそもスポーツとは何かと言えば、ゲームのことです。そのようなことを感じました。

長野：そのことに関してですけれども、例えば「楽しさ」を求める回答した人の割合が学年ごとに変わったりすることはありますか。1年生はゲームの機会がなくて楽しさにつながらないとか。そういう回答があるのかなと思いました。

橘：学年ごとのクロス集計はかけませんでした。データをもう少し詳しく見れば出てくるかもしれません。昔からの伝統で、3年生が試合に出て1年生は球拾いというのが、もしかしたらいまだにあるかもしれません、富山県の状況をみると、逆にどんどん出ざるを得ないぐらいになっているチームの方が多く、「出たくない」とまで言っちゃう子を目にすることが僕は多いですね。

宮城島：私は清水東高校サッカーチームOBなのですが、私が現役の時はだいたい部員が50人行かないぐらいの規模で、トップチームだけが試合をするような状態でした。いま部員は120～130人ぐらいで、何チームかで構成されています。サッカーチームでは全国規模のプレミアリーグからいくつもカテゴリーがあって、県リーグにも3～4チームが参加している感じです。試合に出られる子が増えている状況にあると思います。

学校単位の部活動の一つの問題として、トップを目指す子たちと、FUNスポーツでいいよという子たちが、学校という単位で一つの部活にいなきやならんというところが問題なのかなと思います。それぞれの志向に合わせてスポーツができるのがいいと思いますけど、どうしても学校の部活動だと、この学校は上を目指す部活になっている、この学校はFUNスポーツにとどまる活動になっている。だから、FUNスポーツにとどまる学校に所属している生徒は上を目指せないとなるわけですね。それそれが不幸になるので、そのあたりを解消するためにも地域クラブへの移行はいいのかなと個人的には思っています。

佐伯：僕も富山県で初めて高校生のサッカークラブを、部活動と両方やりながら作った経験があります。富山県U-18サッカーリーグが発足した年ですから2004年ですね。僕が部活をやっていた学校には、少しでも上を目指したい子がいました。クラブに来るような子は、富山第一高校で部員が多く

て入部しても相手にされない、富山中部高校のような進学校にいる、学校で顧問の先生や担任の先生と合わない、学校に行くのがいやだという子など、いろんな子が集まっていました。初心者から上手な子までいろいろ混ざるんです。高校生になると所属欲求みたいな、中学生とは欲求の満たし方が違っていて、うまい下手よりもわいわいできる、大人で言うと異業種交流ですかね。異質な人間の集まりに価値を見いだす子が多くて。東大を目指す進学校の子が、全く勉強しないどこかの学校の子と一緒に試合に出たり寝食をともにしたり、合宿したり遠征したりしています。進学校の子は「お前勉強しなきゃダメだよ」って勉強の仕方を教えているし、勉強嫌いな子は、勉強ばかりして「お前勉強ばかりしているとろくでもない社会人になるぞ」って。バスの中とか、飯食べてるところでもいい感じのコミュニティができていました。同質の学校ではとても経験できない。だからこそゲームでは一つにまとまっていました。部活動で見ている合宿の様子と、クラブでやっていた合宿の様子をみると、社会性がすごく高いのはクラブの方だったなと思います。

環境を変えるのもありますけど、もともとその子が選んでいくところが一番楽しいんだろうなと思うんです。レベルで分けるよりも、本人がチョイスできるゾーンがいくつあるか。選択肢が多ければ多いほど楽しみやすいのかな。嫌ならやめればいい。やめることに關しても、学校の場合、やめたら学校に居づらくなるといった負の連鎖が出てきます。やめたければやめればいい。次にまたどこかに所属する機会を設けられたらいいんだろうなということを、クラブ運営して思いました。

中塚：学校も地域クラブも同じだろうと思うけど、子どもの側に「選択する力があるかどうか」というところにかかるような気がしますね。あまりものを考えないで、自分がいる環境に流されている子がすごく多い。近年ますますそういう子が増えてきた気がしています。高校生ぐらいになったら、自分のことはちゃんと自分で考えろと思うんだけど。進路選択も含め。

その前段のところで、どのように自分の好きなことに関わっていくのかということですね。選択肢がたくさん用意されたときに、それをちゃんと選択できるのか。そういう力を中学生、小学生の間に身につけられているのだろうかということを、もう一方で考えます。

佐伯：高校のクラブは必要だと私が思うのは、こんな例がありました。開業医の整形外科医の子どもで、小さいころからお父さんの後を継ぐようにと言われ、ずっと勉強もしながら小・中とサッカーをしていた子です。サッカーも上手で、中学3年生の時にはクラブにいたけど、サッカーの強豪高校から推薦の話が来てるけど行かないかというのが中学校の進路指導で入ってきました。クラブ側も、自分のクラブを有名にしてほしいので行ってほしい。するとその子は、医者になる夢を諦めるか、サッカーを取るかという選択に迫られます。仮にサッカーを選択したあとで大怪我した場合、選手生命的にダメだし試合にはトップチームで出られなくなる。授業料免除や遠征費もかからないという条件で推薦で入ったのに、保護者も本人もその学校にはいられなくなって退学。いま私は定時制・通信制の学校に勤めていますけど、スポーツ推薦でダメになった子が編入してくるのがよくあり、相談をたくさん受けるんです。高校生のクラブがあれば、医者を目指す勉強したければ進学校に行けばいいし、大工になりたかったら工業高校行けばいいし、次のキャリアをちゃんと考えながらサッカーができるようになる。クラブはクラブで、自分のやりたいスポーツはそこへ行けばできるとなると両方輝けるいいんじゃないかなと思うんです。

スポーツ同士の選択じゃなくて、人生の選択も、クラブがあると選びやすいんじゃないかなと思います。その場で自分で選んでいくしかないんですけど、機会を与えることにはなるなど。

親子揃っての進路相談で、このまま有名な高校へ行ってサッカーしていいんでしょうか、自分のやりたい夢も捨てなきゃいけなくなる結果になつたらどうしようかみたいな。それはスポーツの楽しさとは相反するのかなと思います。

中学校の部活の地域移行がうまくいけばいくほど、では高校はどうなのということをよく考えてい

く必要があると思います。

中学生のそういう相談はないですか。何とか第一高校に行けって言われて悩んでる、本当は中部高校へ行きたいのに、とか。

橋：中学生が、サッカーの強豪校に行くか進学校にするかで悩んでいるというのをよく聞きます。本当は進学校に行きたいのにとか。ですが、どちらかというと、もう自分で選べる力がある選手が両立しているかなと思います。そういう選手は自分でしっかり選べています。その例で言うと、先ほどおっしゃった、お医者さんの道を捨てないでやっている生徒が、富山中部高校の卒業生で、いま筑波大学蹴球部にいる小川遼也君という3年生の学生です。彼はお父さんもお母さんもお医者さんで、おじいちゃんもお医者さんで、医学部に行くことも考えていました。本校の生徒だったのですがカターレ富山のユースに所属していました。その彼が筑波大学の体育専門学群に入学します。彼の目標はプロサッカー選手になることです。その後、キャリアチェンジをして医学部に行き、お医者さんになるとというキャリアプランができます。だから彼の場合、進路指導としてはためらいなく「体育に進みなさい」という感じで、後押しさは簡単にできました。アメリカだと、プロスポーツ選手がセカンドキャリアとして医者や弁護士を目指すことがこれまであったということですが、そういうことを日本でも進めていくことができるのなら、よりいいだろうなと思います。いまの高校生を見ていても、スポーツをする子はスポーツをする大学へという進路選択だけで、人生すべてのキャリアが終わっていきそうな感じがするので、制度的なところも含め、高校現場ではそれを指導していけるような体制が整えられたらしいと思います。何をしていけばいいかなというのは、ちょっとと思いつかないで、やれることをやっていこうという感じですね。

宮城島：似たたような事例として、静岡に昨年、NPBのファームリーグ、二軍のリーグ戦に参入した「はやて」というチームがあります。そこは一軍は持っていないんですけど、プロチームなんです。そこに竹内選手という選手がいるんですが、彼は実際に医者の免許を取りました。取りながらプレーを続け、最後のチャンスだということでプロにもチャレンジしたいということで、いまがんばってピッチャーやってます。優れた選手は、そうやって自分の人生を並行して考えながら、うまくチャレンジできると思います。

難しいなと思うのは、どうしても日本では一つの物事に打ち込むことに美德を感じているところです。スポーツ漫画を見ていても、最近ちょっと変わってきていますが、いわゆるスポーツバカ、サッカーバカみたいな生き方が尊重されるところがあるようです。本来、この子にそれを強いていいのかなというようなときに、周りからそこを強いられて、その子がしっかりとした選択ができていないんじゃないかなということが見られるなあと思っています。

このあたりについて、実際に高校の現場で見ていて先生方がどう思われるのか、ちょっと聞いてみたいなと思うんですが、いかがでしょうか。

佐伯：定時制通信制高校にいるんですけど、全日制と違うのは、全国大会が種目ごとに違う日に開催されるんです。夏に定時制のインターハイがありますが、お盆に陸上があって7月にはバスケが、野球はお盆の前というように8~9種目、自転車も含めて開催日程がずれています。県予選の仕方さえ工夫すれば、すべての種目に出られるんです。実際、陸上とバドミントン、陸上と剣道のように、2~3種目に出る子がいます。全日制でも冬のインターハイと夏のインターハイは違うと思いますけど、高校の県予選がすべての種目を同じ日に開催するので複数種目には出られない。全国大会も、自治体の予算もあるだろうし開催費用もあると思うので難しいのでしょうかけど、同じ日に全種目一回でやってしまう。だからいろいろやってみようという気にすらならない。ある程度高度化すると、シーズン制にするなど、せめて冬の種目と屋内の種目と屋外の種目は分けて予選をし、最終的にみんなが集まって

やる大会も工夫してずらしていけば、地域の協会や連盟、総合型クラブとうまく連携して意識づけができるのではないかと思います。小学校のころは卓球と野球やっていた。よく見たらどっちにも出られそうだ。先生に頼んでみようみたいなことが起こるといいかなと思います。

定時制はそれできるので参考になる話かなと思いました。

中塚：その話と重なるところもあるので、後半の話に移りましょう。

佐伯：そうですね。発表の方に移って、最後にまたフリートークできればと思います。

宮城島：一つ教えてください。先ほど部活と地域クラブということで、アンケートの中では退部した理由の中に「それ以外の社会活動」が項目に含まれています。私はいま本業の方で、高校生向けのアントレプレナーシップ講座を担当しています。1ヶ月とか半年とかのプログラムに参加していただくようなものを行政主催でやっています。地域のボランティア活動のようなことをやったりするのはこのアンケートの選択肢にはないわけですけど、それは地域クラブ活動として扱われているのかどうなのかを教えてください。

橋：調べることはできていません。部活動に参加していない子たちが何をしているのかははっきりとは見えていないので、そこは研究を深めるポイントかなと、いまお聞きして思ったところです。富山の高校生たちは真面目なので、あまり学校外の活動に積極的じゃないというのが正直なところだと思います。真面目と言えばいいのか、目が向かないというか。そんなことをする暇あったら勉強しろぐらいが実情なんじゃないかなと、私の見えている範囲では思います。

中塚：一つ補足です。同じ学校に38年間もいて定点観測を続けてきました。2006年ごろから国際交流が盛んになってきたことがいまの話と関係するかもしれません。部活動に一所懸命取り組むようなパワーのある生徒の中には、いろんなことに興味・関心を持って意欲的に取り組む者もいます。国際交流プログラムに応募して事前研修や交流プログラム、事後報告など、けっこうなエネルギーを注ぎます。学外機関との交流もあり、宮城島さんが紹介されたアンドレプレナーシップに近いものがあるかもしれません。一つの学校の中での話ですけど、部活動とは異なるこのよう活動がはじまり、そちらに力を注ぐ生徒が出てきた。一日は24時間なので、全部捧げるわけにはいかなくなります。そういうことがあった先にコロナの4~5年があり、学校の部活動はじめ、いろんな活動の求心力が低下しているのを感じます。勉強は塾でという傾向もその一つですね。東京都内の他校の先生と話しても近いものがあります。部活への加入率の低下はいろんなところで出ています。

佐伯：ありがとうございます。では次に中塚先生の方から第2弾の発表をお願いしたいと思います。

## II. プレゼンテーション②：中塚義実

### 高校の部活動で何ができるか—38年の定点観測からみえるもの

3月いっぱいで筑波大学附属高校の教師生活を終えました。そのタイミングで朝日新聞夕刊に取り上げてもらった記事があります。「“部活改革”原点は高校時代のあの言葉」「楽しむサッカーやりたいんです」という見出しがあります。先ほどの議論で出てきた「楽しさ」ということです。

私自身はプレーヤーとして中・高・大・院、その後は教員として38年間、同じ学校で部活動を見続けてきました。結果的にいくつかの“部活改革”につながりましたが、あくまでも目の前で起きていることに対処した結果です。せっかくの機会なので少し整理して話をさせていただきます。「高校部活動で何ができるか—38年の定点観測から」というお題にしました。

今日はこのようなことを話します。最後のディスカッションにつなげていきたいと思います。

去年2月23日に、筑波大学附属高校蹴球部は創部100周年の行事を行いました。戦前で言うと東京高等師範学校附属中学です。嘉納治五郎が校長を務めた東京高師の卒業生が全国の師範学校・旧制中学校に赴任して、今の学校教育のベースとなる、日々の授業やホームルーム、学校行事や委員会、部活動をやってきました。お膝元の旧制附属中学では全国のモデルとなるような教育が為されます。全人教育ですね。

サッカーも東京高師とともに附属中が「もう一つのルーツ校」と言える学校です。100周年記念式典には文京区長も、筑波大学の学長も来られました。令和5年の文化功労賞を受賞された阿形清和さんもいらっしゃいました。附属蹴球部OBの研究者ですが、行った先の研究所でサッカーパーを作り、アクティブに活動されています。附属の卒業生は昔から、行った先々でサッカーパーを作ります。「部活」というのも変だけど、研究所でサッカーやりたい仲間を集めてチームを作るんです。筑波大の学長も別の研究所でサッカーチームを作って活動していたサッカーでのライバルです。だから百周年にも来てくれたということです。

やりたい人が集まってはじめる。これが部活動の原型です。

まずは部活動って何だろうということで、少し歴史のおさらいをしておきたいと思います。

#### 1. 部活動は…

##### 1) 「遊び」からはじまった

筑波大学附属高校の今年度の卒業生は133回生です。100年少し前の30回生の手記があります。男子校だった戦前の高師附中の昼夜休みの様子です。「全生徒の推定70%が（グラウンド）全面に散らばって」ゴムまりのベースボールの間で何組もがサッカーをやって遊んでいる様子です。「特にフットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた」。これが約100年前の蹴球部のはじまりです。

#### こんなことを（例を挙げて）話します

##### 1. 部活動は…

- 本来、「遊び」からはじまった
- 戦後、部活動は拡大した
- 部活動改革のうねりは何度もあった

##### 2. 改革の方向性＝「新たな価値」の創出 —「文化としてのスポーツ」の観点から

##### 3. 高校部活動で何ができるか —38年間の“定点観測”と“実践”

##### 4. 今後に向けて

## 大正期の附属中の校庭のようす②

全生徒の推定70%が全面に散らばっているというグラウンドコンディションでは、ショートパスをつないで、相手方のゴールに迫る以外に手はない。毎日そういう遊びをやっていれば、誰にも教えられずに、ショートパスの要領を自得する。附属のものならほとんど誰でも、ある程度以上にボールに対するなじみの深さ、ないし、なれのレベルの全般的な高さは、この遊びに由来するといえると思う。

(中略)特にフットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた。

「蹴球部の紀元前の話」岡山俊雄氏(30回)の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』1984年5月発行 60周年記念誌

卒業後も、行った先々でサッカーをする場をつくってきたのは先ほど言った通りです。おそらく部活の始まりとはこういうものなのでしょう。やりたい人がやりたい／続けたいから始めるのです。組織的にちゃんと遊ぶ仕組みが部活動です。

いろんな大人が見守るってくれるのですが「大人の過剰進出には要注意」ですね。先ほど柔道の話がありましたが、善意から指導してくれるのかもしれないけど、本人がそれを本当に求めているのかはわかりません。大会に関しても、勝ちたがっているのは指導者の方で、本人たちはそこまでこだわっていないかもしれない。

持続可能な部活動を考えたとき、やりたい人がやるということ、見守る大人は学校の先生だけではダメということは目に見えています。そして「自分のことは自分で、生徒自身がささえる部活動」を学力に関係なく目指していくべきだし、それが本来のすがたなのだろうと思います。

## 2) 戦後、部活動は拡大した

部活動は戦後、拡大の一途をたどり続けます。早稲田大学の中澤篤史先生が2018年1月の全国高体連研究大会の全体会で講演された内容を引用しながら紹介します。

部活動は戦前から、やりたい人がやりたいようにやってきましたのですが、戦後の教育改革においては自由と自治のシンボルとして、GHQはじめ教育改革の担い手から奨励されます。民主主義のシンボルと位置付けられたのです。

そこから1964年の東京オリンピックへ向けては、競技力を高める選手中心の考え方で展開していきますが、東京オリンピック以降、より大衆化へ向かいます。部活動というよいものをみんなのものにしていこうという平等主義です。部活動の必修化、あるいは必修科目としてのクラブ活動が学習指導要領に入ってきて、部活動的なものが拡大していくのもこの時期です。

そして1970年代から80年代、ちょうど私自身の中学校・高校時代と重なりますが、全国各地で学校が荒れていた時代です。大阪出身の私のまわりの学校も荒っていました。そしてそういうところでは非行防止の観点から、部活動が奨励されました。部活にエネルギーを注いでいれば悪さもしないだろうというような、管理主義の観点です。スクールウォーズなどのテレビの影響もありました。

民主主義→平等主義→管理主義という学校側の考えの中で、部活動はどんどん拡大していったということです。

## わかったこと&今後へ向けて

### ◆やりたい人がやりたい/続けたいから始めた。 組織的に、ちゃんと“遊ぶ”仕組みが部活動

- ・自主・自律・自由。自分たちの組織で自己管理！
- ・やるべきことをしなかったら、やりたいことはできない！
- ・いろんな大人が見守る(大人の過剰進出には要注意！)

### ◆持続可能な部活動を目指して！

- ・やりたい人がやる！
  - 続けるためには「ささえる」ための配慮が不可欠
  - 学校がささえ続ける「部」と、  
そのときやりたい人が集まる「同好会」の整理を
- ・見守る「大人」は、学校の先生だけではダメ！
  - 卒業生や保護者、地域の力の活用を(ただし...)
  - ・自分のことは自分で。生徒自身が「ささえる」部活動を！

中塙義実「部活動は時代とともに一筑波大学附属高校蹴球部100年のあゆみから」  
第61回 全国附属学校連盟高等学校部会教育研究大会資料 2019年10月18日

## 運動部活動の戦後史

### 部活動の拡大プロセス



中澤篤史(早稲田大学)  
第52回全国高体連研究大会(2018年1月18日 於島根県民会館)  
シンポジウム「2020年へ向けて—高体連研究部の新たな使命」発表資料

### 3) 部活動改革の動きは何度もあった

拡大する部活動への対応は戦前からありました。野球が導入された明治・大正期、例えば早稲田と慶應のベースボールの試合は、単なる野球の試合を越えて、学校間の優劣を競い合う場として拡大していきます。野球部員は授業には出なくていいから次の試合に勝ってくれというように、学生スポーツとしてのあり方が、主に教育界から問題提起されます。東京朝日新聞紙上で展開された野球害毒論争です。その4年後に、系列の大坂朝日新聞社がいまの高校野球を関西で始めます。「学生野球はこうあるべき」だと考えたものを競技会として新聞社が企画したもので、しかしメディア主導の競技会はさらに盛り上がり過熱化し、野球界だけではコントロールできないところまで行き着きます。当時の文部省から出された野球統制令は、戦後の学生野球憲章につながります。近年少しづつ緩和されてきましたが、学生野球を取り巻く様々な制約にはこのような背景がありました。

戦後拡大する部活動をめぐっては、部活動の位置づけの議論の先に「必修クラブ」が置かれた時期がありました。やりたい人が自由に加入する部活動とは異なるもので、学校現場では戸惑いが大きかったでしょう。部活動への参加で代替されたりしながら、それでも30年ぐらい、制度として続いていました。1999年に廃止され、部活動が学習指導要領に一切記載事項がなくなりましたが、2009年から「学校教育の一環として」行われるものとして部活動が説明されています。しかし教育課程外です。

こういうのとはまた別の動きですが、1960年代の終わりから70年代にかけて、熊本県では部活動の社会体育化が進められていました。いまと同じ話です。1966年ごろから教員手当問題が議論されはじめ、県全体で社会体育科を進めたものですが、1970年の柔道事故問題で敗訴し、補償問題への対応が課題となります。運動部活動を勤務時間内に制限し、運動部活動のうち本来学校教育活動以外で行われるものについては新たな組織によって運営される必要があるとして社会体育へ移行しました。

1978年に災害共済給付制度が改訂され、死亡見舞金が大幅に改善されます。社会体育の保証制度より充実した災害給付を受けるためには教員が指導する運動部活動となる必要があったため、社会体育化されつつあった運動部活動は再び学校体育に戻りました※。

このように何度も行き来しながら、似たようなことをやってきたわけです。

いまも部活動は教育課程外に位置づけられています（右図参照）。

※部活動のこれまでの変遷等について（熊本市）

[https://www.city.kumamoto.jp/kiji00346183/5\\_46183\\_331397\\_up\\_GCHA08BD.pdf](https://www.city.kumamoto.jp/kiji00346183/5_46183_331397_up_GCHA08BD.pdf)

### 何度もあった「部活動改革」の動き

◆戦前、過熱化する学生野球（運動部）をめぐって  
1911野球害毒論争⇒1915(いまの)高校野球創設  
1932野球統制令(文部省)⇒ 1946学生野球憲章

◆戦後、拡大する部活動をめぐって

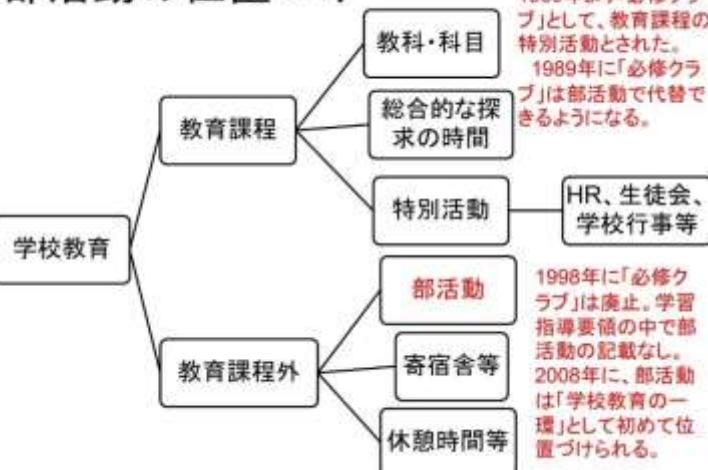
（年号は、高等学校学習指導要領改訂年）

- 1970 必修クラブ導入
- 1989 部活動代替措置（部活動への参加で代替）
- 1999 必修クラブ廃止（部活動の位置づけ不明瞭）
- 2009 部活動への言及あり（「学校教育の一環として～」）

★1966頃～78熊本県「社会体育化」（1978に学校体育に戻る）

### 部活動の位置づけ

部活動（の一部）は、1969年より「必修クラブ」として、教育課程の特別活動とされた。  
1989年に「必修クラブ」は部活動で代替できるようになる。



近年の部活動改革をめぐる動向を挙げておきます。2007年の野球特待生問題。昔からあったこの問題が表面化し、いまでは制度的に各校5名まで認められています。

2009年頃からは柔道の死亡事故問題がありました。武道の必修化の中のできごとです。安全・安心という観点で、学校教育活動の見直しが為されました。そして2012年末、バスケットボール部における主将の自死事件を機に、スポーツ界における「体罰」・暴力問題が大きく取り上げられました。2013年にい

ろんな組織から指導のガイドラインが示されます。現場でどの程度本気度を持って取り組まれたのかはわかりません。その検証も為されないまま、2016年には電通の女性の自死事件を機に「働き方改革」の話が出てきます。教師の多忙化、その主たる要因は部活動だということで「ブラック部活」という言葉が出て、運動部活動、文化部活動のガイドラインが示されます。そして新型コロナのパンデミック。部活動がまったくできない時期があり、部活動改革が一気に進んだ感があります。

このころ私は教員生活のほぼラストにあったわけですけど、部活ができなくなり、週末や放課後に自由時間ができる。そうか、部活をやってない先生はこんなに時間があったんやということを改めて感じたのがこの頃でした。

こんなドタバタの中で、部活動の地域「移行」、いまは地域「展開」と呼んでいますが、部活動改革は待ったなしということになっているわけです。

先ほどから出ている全国高体連研究部には、私も活性化委員長として長らく関わってきましたが、2023年1月に全体会で講演をさせていただきました。そのときのスライドからです。「部活動を学校の中で完結させるのは無理」です。本気で部活動改革に取り組もうというようなメッセージです。先ほど佐伯さんが20年前の発表時に指摘されたコメントとは真逆です。

それでも、部活動は大事にしていきたい大事な学校文化です。担い手の意識が重要です。自分の教科のことだけでそれ以外は何もない先生を「なにも先生」と私は呼んでおりますが、「なにも先生は、教育に誠実に向き合え！」と。一方で、部活しかやろうとしない「部活先生は、全体を見よ！」と。

## 部活動をめぐる近年の動向

### ◆2007年 野球特待生問題

2012年度から「野球特待生制度」(1学年5名以下で認める)【高野連】

### ◆2009年～ 柔道部での死亡事故問題

2010年3月 全国柔道事故被害者の会

2012 武道必修化

2012年7月 学校における体育活動中の事故防止について【文科省】

### ◆2012年12月 桜宮高校バスケットボール部事件

### ◆2013年 「体罰」・暴力問題

2013年1月 運動部活動における体罰根絶に向けて(通知)【全国高体連】

2013年4月 スポーツ界における暴力行為根絶宣言【日体協・JOC・中高体連等】

2013年5月 運動部活動での指導のガイドライン【文科省】

### ◆2016年～ 「ブラック部活」問題 ※働き方改革 2017 部活動指導員制度

2018年3月 運動部活動のあり方にに関する総合的なガイドライン【スポーツ庁】

2018年12月 文化部活動のあり方にに関する総合的なガイドライン【文化庁】

### ◆2020年～ 「新型コロナ」のパンデミック ※部活動の意義は？

### ◆2023年～ 部活動の地域移行⇒展開 ※部活動改革は待ったなし！

2023年1月12日 第57回全国高体連研究大会

## 部活動を取り巻く状況から感じること

### ◆部活動を学校の中で完結させるのは無理

・地域との連携／卒業生の活用など

・学校施設は地域の財産

・教師にとって本務ではない

・生徒にとっても、いますべきことがある

**本気で「部活動改革」に取り組もう！**

### ◆部活動は、大事にしていきたい学校文化

**担い手の意識が重要**

**「なにも先生」は、教育に誠実に向き合え！**

**「部活先生」は、全体を見よ！**

去年の12月、スポーツ庁のホームページで中間取りまとめが示されました。その中から一部引用させてもらいます。

「地域移行」から「地域展開」への名称変更については、「①学校内で運営されてきた活動を広く地域に開き、地域全体で支えていく」ということだけだと、部活動のいい面も悪い面も地域に丸投げになってしまふんじゃなかろうかという印象があり、「②新たな価値を創出し、より豊かで幅広い活動を可能とする」ものにしていくことが大事だろうということです。「地域展開」という言葉にはそういう意味が込められているということです。

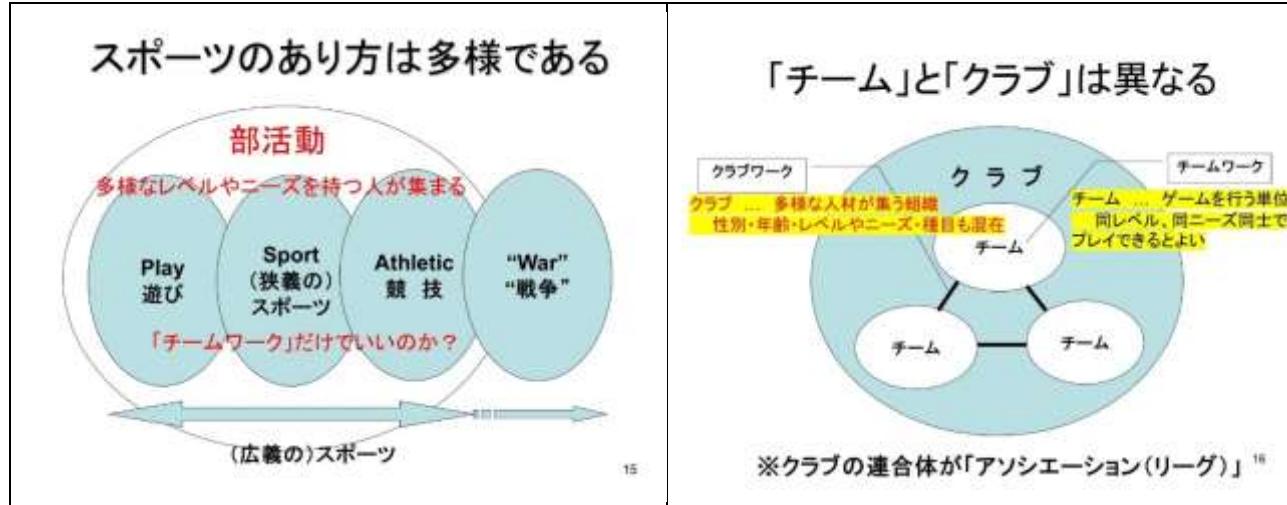
日本部活動学会初代会長の長沼豊さんは、最初のころから「地域展開」という言葉にこだわっておられましたが、ようやくその言葉がメインとなりました。

地方ほど、より深刻な問題が見えてきます。「少子化」「高齢化」「過疎化」「人手不足」は深刻です。従来のままでは絶対無理です。地域社会のソーザー（創造・想像）的な活性化のためにも、部活動の地域展開を好機としたいと考えます。

おそらく地域に固有の課題があるでしょう。だから答えも地域ごとにあるだろうなと考えます。

## 2. 改革の方向性=「新たな価値」の創出ー「文化としてのスポーツ」の観点から

改革の方向性、すなわち「新たな価値」についてみておきたいと思います。と言っても私自身にとっては「新たな」価値として再認識したわけでも何でもなく、大学・大学院でスポーツ社会学を学ぶ中で、文化としてのスポーツの観点から「当たり前」のことなのですが、その観点からみてみると「おかしいな」と思えることです。機会あるごとに話しさせてもらっていますが、改めて述べておきたいと思います。



スポーツは、非常に幅の広い文化です。「スポーツ」と言っていますが、芸術などの他の文化領域もおそらく同じだろうと思います。はじめにあるのは遊びです。やりたい時にやって、やめたい時にやめられるのが遊びです。やっているうちにやめられない止まらない状態になる、それぐらい、プレイ

している瞬間が楽しくて仕方ない状態を狭義のスポーツと呼んでいいでしょう。さらにやっているうちに、プレイした結果に第一の重きが置かれる段階、それは勝利だったり新記録達成だったり、コンクールで表彰されたり、そういう結果に重きが置かれるようになってきます。本来の遊びから少しづつ離れていくわけですね。やっていることは遊びですが、姿勢としては競技、Athleticと呼べるもので。このように、結果に第一の関心事を持ってやっている人のことをアスリートというわけです。この段階ではやめたいときにやめられるなどと言っている場合ではありません。つらいけど、その先にある何かを求めて取り組む段階です。

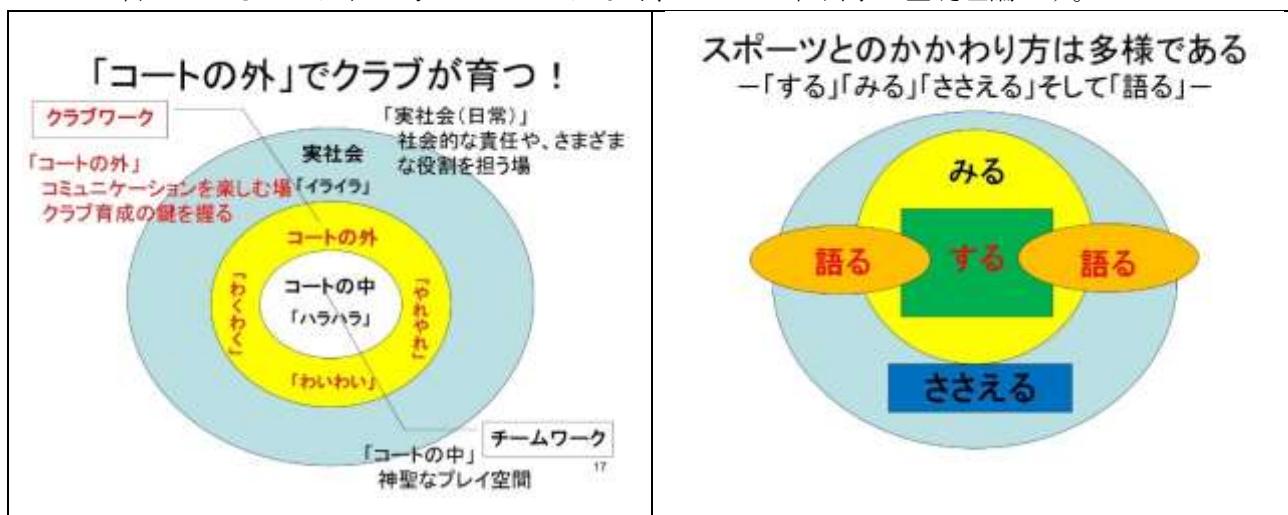
芸術の世界にあるかどうかわからないけど、スポーツの場合、それぞれが背負う看板、例えば民族的なもの、宗教、国、要はスポーツという遊びが代理戦争のような形になっていく段階もその先にあり、それも含めてスポーツと言っています。

部活の中には、プレイ志向から競技志向まで幅広い人たちが属しているわけです。これをチームワークでくくろうとしても、それは無理です。チームというのはゲームを行う単位です。同レベル、同ニーズ同士でプレイできるとよいでしょう。入れ込んでやっている人たちの対戦相手は、同じように気合十分の人たちでやるべきです。そうじゃない人たちのチームがあっても全く構わないわけですが、お楽しみチームはお楽しみチーム同士で楽しめればよいのです。

大事なのは、違いを認めた上で、いろんな人が集まるクラブという概念です。日本ではチームワークの物語ばかりが強調されるけど、本当は多様な人たちが集い、互いをリスペクトし合うクラブワークが大事なのです。男子チーム、女子チーム、あるいは中学生チーム、高校生チーム、おっちゃんチーム、おばちゃんチーム、あるいはバレーチーム、バスケチーム、サッカーチーム。このように考えると多世代型・多種目型の総合型クラブになっていくわけですね。

試合に出る、大会に参加するチームだけでなく、クラブというものにもっと目を向ける必要があります。クラブの集まったものがリーグ、あるいはアソシエーション（協会）です。協会や連盟は、チームを集めて大会をするだけではありません。

ここで言っていることは私が考えたことではなく、スポーツ社会学の基礎理論です。



ではどこでクラブが育つのかというと、スポーツ空間論が有効です。実社会のイライラ空間からコートの中のハラハラを楽しむ遊び空間に移動します。コートの中はチーム単位の活動が中心になるわけです。遊び空間の外側にはコートの外と呼べる空間があります。スポーツだったら更衣室やシャワー室。着替えながらわくわくして、今日はこういうプレーをやったるで～思うわけです。終わった後はシャワーを浴び、高校生だったら駄菓子屋へ。駄菓子屋は。今はコンビニかな。それから大人だったら居酒屋で一杯やる、わいわいする空間。こういうところでコミュニケーションを楽しむのです。

クラブ育成の鍵を握る場で、クラブハウスの機能です。

もう一つ。スポーツは「する」ことが原点ですけど、自分の知り合いを応援したり、レベルの高いプレーを見て楽しむこともあります。それらをささえることも楽しみとなり、それらを通して語ること、スポーツを語る、スポーツで語ることも楽しみの一つです。このような多様な楽しみを受け入れるようなクラブ育成が求められています。

これらを「日本的なスポーツ観：これまでとこれから」に整理しました。

チームからクラブへ。「選手」という言葉をなんとなく使ってしまいがちですが、選ばれた人という意味ですよ。だから「補欠」が生まれてしまうのです。そうじゃなくて、ちゃんと遊ぶ「プレーヤー」へ。補欠ゼロ、プレイ・スポーツ・競技、そして大会中心ではなくて日常生活中心へ、負ければ終わりのノックアウト方式のトーナメントではなく、リーグ。

このような考え方で、学校・企業から地域へというのは必然です。

### 日本的なスポーツ観：これまでとこれから

<これまで>	<これから>
チーム	→ クラブ
選手	・ プレイヤー
多くの補欠	・ 補欠ゼロ
競技志向	・ プレイ・スポーツ・競技
大会中心	・ 日常生活中心
トーナメント	・ リーグ
引退あり	・ 引退なしの生涯スポーツライフ
単一種目年中実施	・ 複数種目シーズン制
「する」	・ 「する」「みる」「語る」「ささえる」
単一価値観に集約	・ 多様な価値観を認める
学校・企業	・ 地域

高校生の体育の副読本のはじめのほうのページで私が担当しているところがあります。学校を生かしたクラブとして、愛知県半田市の成岩スポーツクラブを紹介しています。もう30年ほど前からやっている取り組みですが、成岩中学校の部活動を週3回に限定し、もっとやりたい人は成岩スポーツクラブの会員になって地域の人と一緒にやりましょうという取り組みです。この30年の間にいろんなことがありましたが、半田市のホームページを見ると、成岩以外にもいくつかのスポーツクラブが市内に立ち上がっているようです。いまでは改めて部活動の地域展開の先進事例となっていると思います。

静岡県掛川市も先進事例としてよく紹介されます。ロードマップによると2026年度には部活動を廃止し、それに向けて先行的に、地域クラブでの水泳部活動や美術クラブなど、運動部だけでなくいろんなことを始めています。全国各地でこのような活動が展開されています。

一方で熊本市では「地域移行しない」というふうな判断で、学校の中に部活動をちゃんと置いておくんだということが新聞でも取り上げられていました。熊本市立中学における新しい学校部活動の名称募集をやっています。

このように、地域ごとに結論が違って全くかまわわないと思います。いずれにしても、青少年がやりたいことができる場を作り、それが地域の活性化につながってくるようになればよいと思います。

### 3. 高校部活動で何ができるか

#### —38年の“定点観測”と“実践”

では高校部活動で何ができるかということで、38年間の“定点観測”と“実践”についてお話しします。これも別に高邁な理想を掲げて、こうしなければならないという思いで導いたわけではなく、その時々に、現場だからいろんなことが起きるわけです。それに正面から向き合って、時には教員というか大人同士のネットワークで、時には生徒といろいろ話しながら、いろんなことに取り組んできた、結果的に“部活動改革”に取り組んできたというのをか

### “次の一步”を踏み出す…

1. チームだけでなく「クラブ」を育てる！  
→ 学校運動部のクラブ化  
(事例:筑波大学附属高校蹴球部)
2. クラブが集まり「ソーシエーション」を育てる！  
→ 近隣で「リーグ」を組織し、地域で課題解決  
(事例:DUOリーグ)
3. “同志”による異業種ネットワークを育てる！  
→ 地域を超えてつながる全国ネットワーク  
(事例:サロン2002)  
“志”は「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」

いつまんで紹介します。

念のため言っておきますが、かなり特殊な学校だと思います。恵まれた家庭の生徒が入学してくるし、超進学校ですし、社会に出て活躍しようという“志”を持つ子がいっぱいいるかもしれません。けどただの高校生です。だからいろんな悩みも抱えています。生徒指導案件も各種あります。

そんな学校ですが、定点観測していると面白いことが見えてきます。

ここでは3番目の話は置いといて、1番目と2番目の話を中心にします。

### 1) チームだけでなく「クラブ」を育てる—学校運動部のクラブ化

いま筑波大学附属高校蹴球部は右図のようになっています。もともとあったサッカーチームが100周年を迎えた部ですが、女子蹴球部、女子でボール蹴りたい子たちも今年で25周年を迎えました。主にフットサルをやっています。フットサル部は、競技志向ではやりたくないけど、ボールを蹴るのが好きだという子たちが集まって、サッカーチームの中にフットサルの部門を作ってやっていたのがはじまりです。

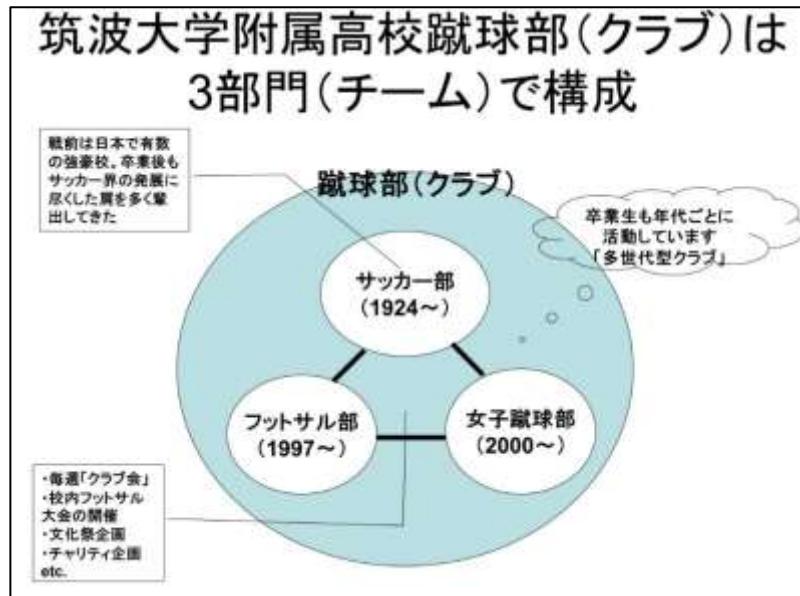
この図はさらに奥行きがあります。卒業後も引退なしで、年代ごとにチームを作つて、あるいは常設チームは持たないでワンポイントで集まって遊んでいます。

まずフットサル部門の話から。1998年のことです。当時は競技志向のサッカーチームしかありませんでした。もともと本校では部活動は週4回と決まっていましたが、そんなに強くもないけれど、一所懸命やる集団でした。

その中である部員が、2年生の夏前だったと思いますが、「僕はサッカー好きだけど、勝利を目指して競技志向でやるのは向いていない」と言うことで、その頃はやりだしたフットサルの同好会を作りますという動きをはじめました。うちの学校の同好会設立規定によると、そのスポーツの人数を集め、40日間の公開練習をし、認めてもらえた同好会になれるということでした。彼は同じクラスの仲間を5人集め、公開練習期間に入りました。少しづつ暑くなり始めた6月ごろからです。5人でできることと言えば2対2とか3対2です。サッカーチームが活動しているグラウンドの横でそういうのをやっていました。けど6月、7月とだんだん暑くなり、人数がどんどん減ってきます。しまいに1対1をやっているような感じでした。暑くて長続きしません。

夏休み明けの職員会議でフットサル同好会承認の審議がありました。現場を見ていない多くの学校の先生は賛成と言っているけど、僕はずっと見ていたので、これではダメです、組織的な活動になつていないと意見して、この設立運動はボツになりました。

ただ、「ニーズの違いを受け入れてほしい」という考え方自体はごく自然なもので。彼の主張は「僕はニーズの違いでサッカーチームを飛び出して、フットサル同好会を作ろうとしたけど、そもそもサッカーチームはサッカーが好きな人の集まりですよね。ニーズが異なるだけの僕をもう一度入れてくれませんか」ということで、その話をサッカーチームのミーティングに持つてきました。事前に私とも何度も相談し、資料を用意したうえでのことです。



## サッカー部員の皆様へ ~元サッカー部員・鈴木からの提案~

1998. 1. 23

「クラブ活動」に対する考え方は色々とあります。しかし現状として、日本の学校運動部においては、勝利至上主義、強さでは何よりもチーム優先といった考え方が先に立ち、「色々なニーズに合わせた活動が行われていません」、皆さんには満足感が異端現れと見たからかもしれません。僕自身の個別活動に対する考え方では、僕が選ぶ時にお話したと思います。

僕が退屈する前、サッカー部でも隊員資格を再検討し、基本的に従来のままでも頑張づけをするという事で決着しました(これは恐らく半枚の他の運動部に比べるとかなり先駆的と思われますが)、まだ壁障などニーズの者を主張に受け入れる意識に有るとは言い難いところです。それを踏まえ、自分の考える運動部の在り方と現状とを比較、疑問を感じて昨年ファットサル選手権を設立しようと試みましたが、恥ずかしながらこれは出来ませんでした。現在に至るまでの経緯の概要は以下の通りです。

5月 会員制に活動申請を提出、公開期間に入るが、入会希望者が集まらない。

七月 会員・責任者会議で設立認可、準正式活動を開始可能に。

9-12月 様式活動開始。しかし必ずしも人數が集まらず、又行事などの關係で思う様に活動が出来ない。

1月 教官会議にて、活動の目的と内容が認められず、半蔵郡下

僕の計画最大の失敗は、人數不足です。そして教官会議で半歩が却下された後、その原因を考え、無(向井会)としての外排を固めすぎた点に大きな問題が有ったと分察しました。その事から、果たしてニースに合わせて小さなチームを分立する事は正しからうかという問題に行き当たり、フトツル向井会設立の理念は行き詰まってしまいました。

新たな形でフットサルの基本理念を生かせる"クラブ"というものをを作るべく、サッカーチーム皆さんにご相談にあがりました、皆さんには今のお話で十分かも知れませんし、理解し難いという点もあるかとは思いますが、ぜひ提案をさせて頂きたいと思います。

フットサルの基本理念は、大会への登録制度に顕著に表れています。それによると、

大会への出場を希望するチームは、大会前に本協会の認定する競技用機に必要な改修

# 「ニーズの違い」 入した上で、該当大会規定 する地域/都道府県協会若 フットサル器具の実績をもとに

## フットサル部門設立の申し出(1998.1.23.)

部員からはボロクソに言われます。「お前、サッカー部辞めたくせに、なに偉そうなこと言うてんねん」みたいな。大阪弁ではなかったけど、そんなことを言われていました。けどこのミーティングを何度かやっているうちに、「ニーズが違うだけでサッカー好きなのは同じ」「1つのクラブの中に異なるニーズの部門があるのも面白い」となってフットサル部門が生まれたんです。

これはちょっと情けない話だけど、楽しみ志向のフットサル部門ができた頃、競技志向のサッカーチームがどんどん減り、2学年合わせて11人、ゴールキーパー不在の時期を迎えます。前半と後半でキーパーが交代する新戦術でゲームに臨むような状態です。

ここでもミーティングを何度も開き、「曜日制部員」を募集することになりました。「サッカーチームはいま、部員12人で大変困っています。お願ひします。少しでも興味のある方見学だけでも構いません。お近くの部員まで」なんていうポスターを貼って月曜部員を募集し、何名かが加わりました。「シーズン制部員」も募集しましたが、3年間しかない高校生活でシーズンという概念が持てなかつたようです。こちらはうまいかなかつたですね。

その翌年です。女子でボールを蹴りたい生徒が5名

フットサル登録制度は、該当大会の期間中のみ活動を見守るものであり、本協会の定める通常の種別毎の登録と異なり、年齢を通じたチーム登録/個人登録を行うものではない。

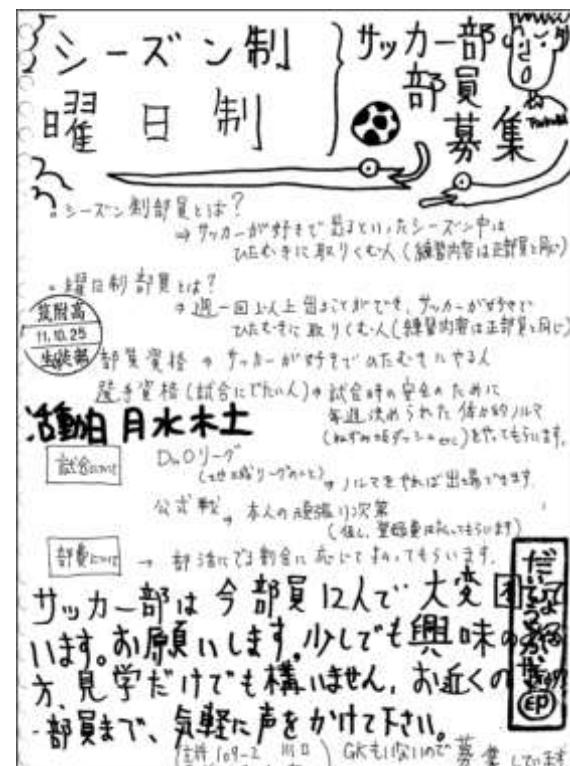
とあります。つまり、どの様な人間の集まりのチームでも、手続さえすれば大会に参加でき、その登録は永続するものではないのです。この規約の趣旨は、ファットサルを誰でも気軽に楽しむ、その遊びを分かち合うというものです。それがファットサルの基本理念そのものなのです。

前書きが長くなりましたが、僕の姿勢は、「誰でも気軽に楽しめる」という理念をサッカーと一緒に取り入れて頂きたい、そして我々も仲間に⼊れて頂きたい、という事です。それを可能にする「クラブ」の例としては、次の様なものが考えられます。当面は「サッカークラブ」という大きな枠組みの中に、サッカーチームとフットサル部門を作る。サッカーチームは、主に大人会で勝つ事を最終目標に置き、それを目指す者が将来酒の練習、トレーニングなどを行う。一方フットサル部門は、とにかくサッカー(フットサル)をプレイヤーの事を楽しむ、できるだけ拘束を少なくする。無論、2部門の間の移籍は自由とする。これはあくまで例ですし、後でこの通りにするという訳ではありません。僕が言いたいのは、「学校の代表選手の重なり」という学校運動部の位置づけを変え、サッカーチーム員長の第1監督、「サッカーが大好きである」という事を尊重、それに該当する者に対してもっと大きく門戸を開いて頂きたい、という事です。僕にその方法が先の例ならば、入選した者は目的に合わせ、2つの部門の好きな方(両方も可能)で活動すればよいのです。又、フットサル部門を作れば、部員員長の第3番目「グラウンド(サッカーチームの活動所)」に欠かさず顔を出す」という日程的障害が小さくなり、より広く部員を集められ、「一般の学校のサッカーチーム活動よりも、何倍かの人が来る」のですから、トータル

私達の運営は確かに気軽にですが、どうしても質が落ち、無秩序になる傾向にあります。しかし、種やかではあっても組織化されたグループでプレイすれば、最低限の秩序は保て、更には場所などの施設を確保できるというメリットが有ります。そうすれば、たとえ遊びに近い感覚であっても、快適にプレイを出来る、ここに気軽にサッカーをしたい者で組織化する意味が有ります。活動の場所と日程については大きな懸念事ですが、ファットサルはそんなに大きなスペースが要らないので、解決可能な問題であると思います(もしもファットサル部門を作るのなら、その活動は、採用み月曜日の放課後が現実的で一番現実的だと思います)。

時代の変化に伴い、学校運動部の在り方も変わらなくてはならない時期にきていると思います。様々な部活動への価値観を抱く人たちも広く受け入れられる、21世紀の「学校クラブ」

入れてほしい」

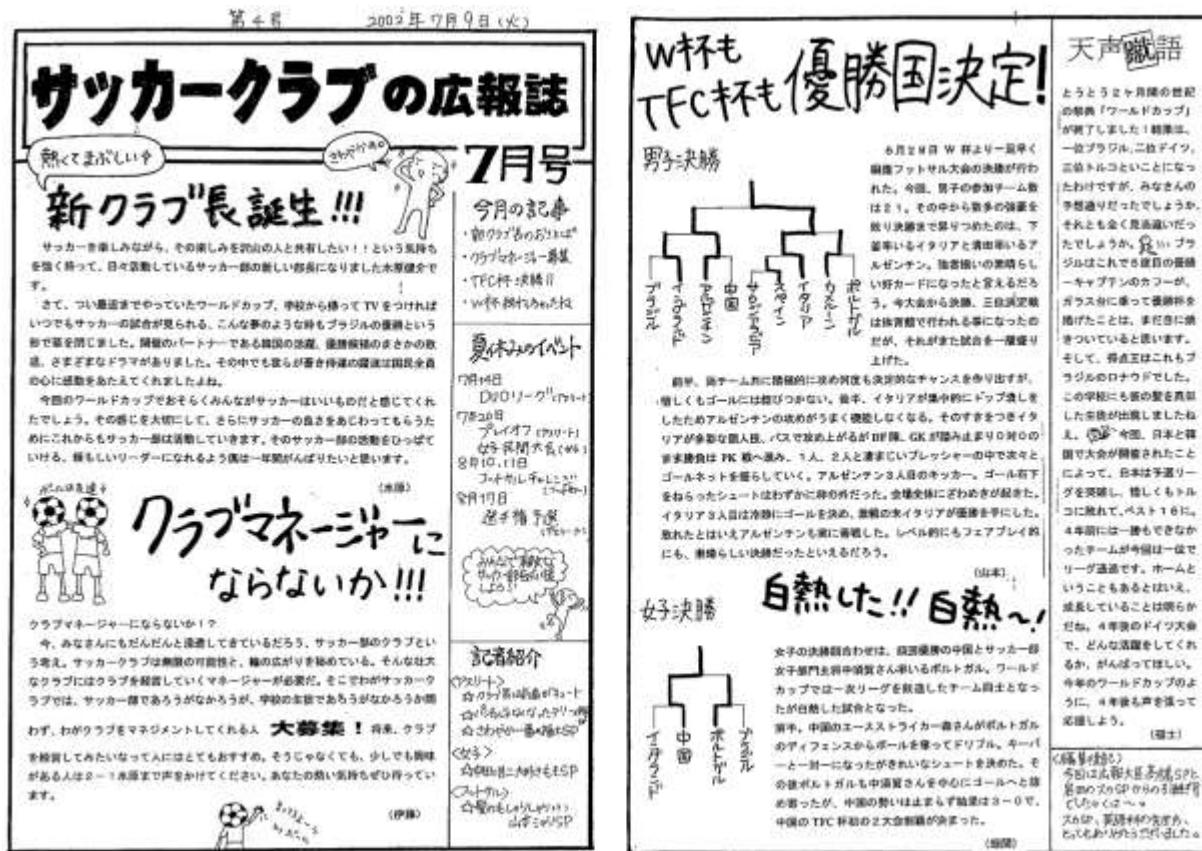


入部してきました。1年間頑張って続けると、1年後にまた5人入ってきて、5対5のフットサルができるようになりました。いまも結構な人数がいます。

フットサル部門と女子部門がでて、サッカークラブ=蹴球部は3部門体制になります。そしてクラブ長を置いて「学校中のフットボールを盛り上げよう」ということをやりだしたのが、ちょうど2002年FIFAワールドカップのころです。

その前から校内フットサル大会の企画はやっていましたが、ワールドカップにからめたイベントにしたり、JFA公認の「KickTogether」に応募したり、しまいにはワールドカップの試合のパブリックビューイングを校内で開催します。これはすごかったです。物理実験室、普段は40人ぐらいで授業をする教室ですけど、そこに200人の高校生が集まってみんなで盛り上がるというのを企画しました。

たしか6月中旬の前期中間テスト最終日でした。試験が午前中に終わるから下校は3時半です。ちょうどその時刻が、1次リーグ最終試合の日本vsチュニジア戦のキックオフです。下校後ではあるけど、どうしてもみんなで見たいんだと言って部員が生徒部に掛け合い、いろんな不備があつて当時の生徒部長からさんざん怒られまくりながらも何とか実現にこぎつけました。大変な思いをしたけど、部員外も含め総勢200名が青いシャツを着て日本代表を応援するさまは見事でした。これをやりきった連中がいま40代に差し掛かる頃で、いろんな分野で大活躍しています。このときにやりきったのが自信になつていると、卒業生で集まるときには必ず話題になります。



広報誌も毎月発行していました。自分たちの大好きなサッカーやフットサル（フットボール）を盛り上げ、学校中の仲間に自分たちの活動を知ってもらおうというものです。年2回の校内フットサル大会は、全校生徒が楽しみにするイベントとなりました。昼休みにグラウンドにフットサルコートを4面作り、男子16チーム、女子12チーム規模の大会です。教員チームも出場して一緒に遊び、大人げなく優勝しちゃう（こともあります）。そんなことをやっていたのがこの時期です。

面白いことにはメディアも飛びつきます。朝日新聞東京版に校内フットサル大会が取り上げられたこともありました。蹴球部員が徹底的に遊びを作り上げていた時代ですね。何年も続いていたこのイベントは、ある時期から運営能力が著しく低下し、コロナ禍もあってできなくなってしまいました。あるのが当たり前で、運営を「やらされている」感覚になったのでしょうか。さえることを遊び感覚で楽しむことができなかつたのだと思います。

フットサルに取り組む女子蹴球部は、一所懸命練習するけど残念ながら高校生女子のフットサルの公式大会はありません。大人の大会に高校生チームが出場し、いつもぼろ負けで終わっていました。初勝利の10-0の相手はガッタスブリリヤンチスエイチピー、モーニング娘の芸能人チームですね。

こういう状況だったのですが、同じように大人の大会に出場してボロ負けしている高校生チームと仲良くなりまます。都立文京高校とか二階堂高校など、同世代の高校生チームに声をかけて、自らの大会を作りました。これは今でも続いています。

ただ放っておいてもこうはなりません。「やってみたら?」というのはこちらから声をかけますし、どうすればできるかについてのアドバイスはします。とくに会場の確保は高校生には難しいですね。我々もサポートしながらやっていたら、こういうができるわけです。

自分たちでアクションを起こした立ち上げのころのメンバーは、問題意識と当事者意識をしっかりと持っていました。しかし長年やっているうちに、この大会があるのが当たり前になり、問題意識も当事者意識も持たないまま、ただやらせてもらっている感覚に陥ります。生徒が何もしようとしない。卒業生がうまく受け継いでくれたので何とか続いていますが、少しでも油断するとすぐなくなってしまいます。卒業生との連携は重要です。

卒業生とはさまざまなかたちでつながっているのが本校の部活動の特徴と言えるでしょう。蹴球部もしっかりした卒業生の組織があります。富山中部高校も、卒業生や保護者の組織がいろんな形でさえてくれているのをお聞きしました。保護者会も大事ですよね。それも含めてクラブです。

筑波大学附属高校蹴球部同窓会は桐窓サッカー倶楽部と言います。2004年の創部80周年のときにはシート板を寄贈してくれました。また東日本大震災の時、3月末まで部活ができなかったのですが、4月3日の再開時に卒業生に声をかけて「チャリティ・フットボール」をやりました。OBがたくさん集まり、ただボールを蹴っているだけなんだけど、募金箱を置いて、ちょっといいことしたなという気になりました。

豊島区のNPOと連携して、被災地の中学生を都内に招待してサッカー交流をしたこともありました。被災地の中学校ではグラウンドに仮設住宅が建ったため広々としたところでのサッカーができなかったのですが、夏休みに来てもらって一緒にボールを蹴るということを何年か続けました。

去年の11月、高体連の新人大会の写真です。本校は11人いますが、対戦相手は7人しかいません。これで全員だそうです。顧問の先生に聞いてみたところ、この学校の野球部は1人しかいないそうです。少子化はもちろんありますが、それだけではありません。学校の部活動の求心力が低下しているという話を、都内の多くの学校で耳にします。

男子のフットサルの公式大会、女子もU-18フットサルリーグができました。本校の体育館も会場になります。さっきも言ったとおり、各部門の活動は整備されました。しかしクラブとしての取り組みは停滞、衰退、そしてさらにコロナ禍が追い打ちをかけるというのが近年の大きな出来事です。

38年間の“定点観測”を続ける中で、生徒の変化を感じます。ここ10年以上いつも言っていることは右のスライドにあるとおりです。

言われたことはきちんとやるし素直なのですが、コミュニケーションの質と量が大きく変わり、ソーザー力（想像力・創造力）の欠如ははなはだしく、「決断」できない。そして迷ったらやらない。タイパ・コスパ重視で楽な方を選択する。総じて“遊び”が下手。これは生徒だけでなく教師もです。えらいこっちゃと強く感じているところです。

## 生徒の変化(大人も...)

### ◆最近(10年以上)いつも言っていること

「(自分のアタマで)考えろ!」「アクション起こせ!」  
「全体を見ろ!」「サンマ(時間・空間・仲間)!」  
「ちゃんとしゃべれ!」「聞け!」「Face to Faceや!」  
「あいまいにするな!」「やり切れ!」「ちゃんと遊べ!」

### ◆最近感じる生徒の様子

言われたことはきちんとやるし、素直だが...  
・「コミュニケーション」の質と量が大きく変わってきた  
・ソウゾウリヨク(想像力・創造力)の欠如  
・「決断」できない(多數決に依存／「先生」に依存)  
・迷ったらやらない／タイパ・コスパ重視で楽な方を選択  
“遊び”が下手(生徒も教師も)。このままでは...  
長期的視野で“教育”的あり方を考え、行動したい...

ただ、良い兆しもあって、コロナ明けぐらいに久しぶりに校内フットサル大会が再開しました。

しばらく途絶えていたものを復活させるのは大変だったと思いますが、コロナ明けのころ、当時のクラブ長たちが動いて再開しました。グラウンドではなくコート面1面だけなので参加チーム数は限られていますが、ギャラリーがいっぱい来て盛り上がっています。

冒頭申し上げた蹴球部の100周年。式典だけでなく、別の日に人工芝のグラウンドを確保して、超OBたちはサッカーをプレーします。彼らの高校時代から付き合いのある全国の学校に声をかけて、大勢集まりました。やりたい人がやるのです。

## 2) クラブが集まり「アソシエーション」を育てる

### —近隣でリーグを組織し、地域で課題解決

ここまで話は、私が38年間務めた筑波大学附属高校蹴球部の話ですが、並行して、富山でもやっている高校生年代のリーグ戦を、近隣の学校や地域クラブの指導者と相談して始めました。いまではそれがJFAの方針となって全国各地にユースリーグが展開しています。

リーグ戦が始まる前のユースサッカー環境は、年2回の全国大会と関東大会があり、その予選としての競技会が、負ければ終わりのノックアウト方式で行われていました。すべて1回戦で負けると公式戦は年3試合。しかも、皆が出られるわけではなく、1年生はたいてい補欠。上級生が「引退」と称していくなくなったあとにようやく自分たちの出番になりますが、1年後には自分たちが「引退」しておしま

い。だから実質1年間しかゲームができる環境になかったわけです。

それを、レベルやニーズに応じて、例えば学校の1学期と2学期を使って似た者同士でリーグ戦をやり、その間にサッカーフェスティバルやフットサル大会があり、オフシーズンプレシーズンがはっきりするような環境を作りましょうというのを想定して都内の文京区と豊島区でリーグを立ち上げました。1996年度のことです。

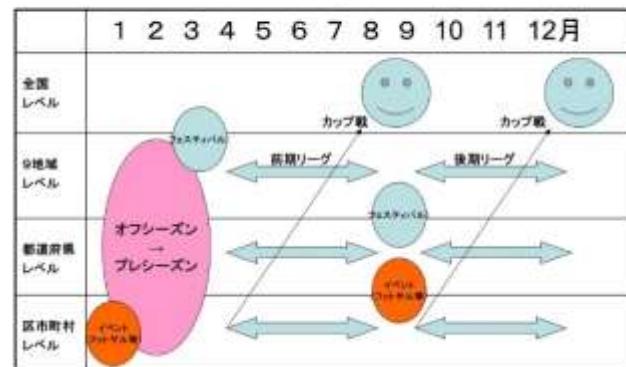
「考えてみよう」のスライドにあることが問題意識の根底にあります。「DUOリーグの理念」を掲げ、理念に賛同するクラブがリーグを構成するという前提でスタートしました。試合数を増やすということだけではありません。理念を実現するための仕組みづくりです。理念を共有するための話し合いは、飲み会を含めたくさん持ちました。理念に掲げた言葉は、いまもいろんなところで生きていると思います。

初年度は6クラブ・10チームで始まりました。「都立小石川(2)」というのは、都立小石川高校から2チーム出るということです。4月から7月の週末にゲームをします。筑波大附は1・2年生チームと3年生チームの2チーム編成で、一番盛り上がったのは両者のダービーマッチですね。高体連の大会には、「ナショナルチームで出るぞ！」といって臨みました。遊び心ある大人が、Face to Faceでああだこうだ言いながら作り上げました。

生徒たちはDUOリーグが始まり、試合数が増えてよかったですと思っているでしょうが、このような理念を掲げてやっていたということをどこまで理解していたかはわかりません。ただ後期になって大会参加費を一チームにつき15,000円徴収することを伝えたとき、一部の部員から「前期ただだったのになんで後期からお金がかかるんですか。高体連はただなのにDUOリーグは何でお金がかかるんですか」と疑問の声が上がり、ミーティングで説明しました。高体連はタタではなくて学校からお金が出ていること、サッカーの試合を運営するのにこれだけお金がかかるということ、この活動を長続きさせるためにも「ささえる」活動を評価してペイすることが大事だということなどです。例えば審判をしてくれた人にはたとえ些少でも審判費を払う。受益者負担の考えです。

部員は、理解はしたけど納得しません。けどこれを言ったら納得しました。1リーグ8チームだから7

## リーグ戦を基盤としたユースサッカー構造 (私案)



### 考えてみよう...

- 1) 試験1週間前は部活動禁止で試験対策  
vs 全体練習は週4日。普段から勉強との両立を  
**「歯磨き感覚」のスポーツライフ**
- 2) 最後の大会が終わると「引退」  
vs 入学から卒業までプレイ。卒業後も「引退なし」  
リーグ期間がシーズン。シーズンごとにやりたいことに取り組める  
**「引退なし」のスポーツライフ**
- 3) 試合に出られるのは1チーム。公式戦は年3回  
vs レベルやニーズに応じて複数チームのリーグ戦  
**「補欠ゼロ」のクラブライフ**
- 4) 顧問の先生だけで手が回らない。1チームしか出せない  
vs 卒業生や地域で「クラブ」をささえ複数チーム出す  
**「ささえる」こともスポーツ**

### DUOリーグの理念

—文化としてのサッカーのあり方—

1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ  
**サッカーの生活化**
2. 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成  
**チームからクラブへ**
3. 強いチームとたくましい個の育成  
**レベルアップ**
4. サッカーをささえる人材の育成  
**自主運営と受益者負担**

部員は、理解はしたけど納得しません。けどこれを言ったら納得しました。1リーグ8チームだから7

試合。1チームは大体15人。一人あたり1,000円です。「おまえらな、1,000円で7試合も楽しめるんやぞ。Jリーグ見に行ったら1試合なんぼや? 2時間の映画見に行ったらなんぼかかる? それに比べたら安いもんやろ」。納得した部員は小遣いから参加費を出していました。こういうことが大事ですね。

1996年度前期(第1回)	1996年度後期(第2回)
<p><b>DUOリーグ開幕</b></p> <p><b>創設6クラブ:都小石川(2)、都向丘、筑波大附(2)、京華、昭和一(3)、三菱養和</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>10チーム、1リーグ制。4~7月の週末にゲーム</li> <li>1節5試合。1日グランド確保できれば1節できる。9節あればできる(夏休み前に充分可能)</li> <li>昭和一は均等3チーム。筑波大附は1~2年と3年の2チーム。高体連の大会には「代表チーム」を編成</li> </ul> <p>この構想を面白がる、"遊び心"ある大人たちが、"Face to Face"でああだこうだ言いながら作り上げた。 優勝...京華高校(うだ言いながら作り上げた。)</p>	<p><b>学習院、豊南、文京区中学生選抜が加盟→9クラブ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1部は各クラブの代表チーム、2部は代表外(現在はレベル別に1・2部制)</li> <li>文京区中学生選抜が後期のみ参加(現在も)</li> <li>筑波大附と京華の2軍が連合軍で参加</li> <li>特別枠選手(19歳以上)は3名まで可</li> <li>大会参加費を、1チームにつき15,000円徴収(いまは1チーム20,000円)</li> </ul> <p>よい活動は自然と広がる。しかし大事なのは"理念"を共有すること。 優勝...三菱養和SC(「小さく立ち上げ、大きく育てる」 いかに続け、広げていくかを考え、実行した)</p>

資格を取得した高校生ができるだけ審判をするようにしていました。主審1,000円、副審500円です。優秀審判の表彰もあります。当たり前のことです。私はチェアマンを19年間やって次の人に引き継ぎましたが、立ち上げ期にいろいろ考えて進めてきたことが必ずしも継承されていないのが残念なところです。コロナ禍の影響もあるでしょう。遊び心ある大人が、Face to Faceでああだこうだ言いながら作り上げるということが、失われているのが大きいと思います。

DUOリーグのことも新聞等のメディアで取り上げてもらいました。また当時担当していたJFA指導者養成講習会「スポーツ社会学」の授業の中でも、あるいはJFA機関誌での連載「ユース年代のサッカーはいま」でも紹介し、全国に広げることに取り組んでいました。

並行して、DUOリーグを都内全域に公認リーグとして整備することにも取り組んでいました。サッカー界の公認だけでなく教育界の公認もあるとよいということで、組織的に動きました。DUOリーグは文京区と豊島区限定でしたが、DUOリーグモデルのリーグが各地にできはじめ、それを東京都全域に広げて整備しようというものです。

東京都ユースサッカーリーグ"規約"ver.4		リーグ監参加チームの条件	
1. 名 称 U-18東京都リーグ1部・2部 U-18東京都リーグ3部 U-18東京都U-10地区リーグ		JFAに登録登録された選手が11名以上いる	
2. 主 催 (財)東京都サッカー協会		未登録選手は出場することができない	
3. 会 員 1部:都内サッカーリーグ、U-10地区リーグ(一部実行委員会)、U-18東京都U-10地区リーグ実行委員会 2部:都内サッカーリーグ、U-10地区リーグ(一部実行委員会)、U-18東京都U-10地区リーグ実行委員会		特別候選手は認めない	
4. 委 員 東京都教育委員会(文京区)、東京都高専連携委員会(文京区)、東京都U-10地区連絡会		監督能力のある大人(20才以上)が監督できる	
5. 会 員 (文京区)、(豊島区)		有資格者であること(指導者資格または教員免許取得)	
6. 施 設 通常(1試合90分、実行90~120分)		賞格は認めない	
7. 会 員 通常にて、参加チームが選考する		定められた試合に審判員(主審1名、副審2名)を派遣できる。主審は有資格者	
8. 参加資格		主審は東京県境から源流	
9) 加盟クラブ		副審は4級以上	
主主に本部地主選手権、都内サッカーリーグに加盟または準加盟している地主 主に都内サッカーリーグに加盟または準加盟する		副審は4級以上	
10) 参加チーム		定められた試合(ホームゲームまたは1勝分)を主催できる	
加盟クラブは、「リーグ監督(手本監督)」若しくは「リーグ監督」、リーグ監に参加することが認め る。リーグ監に「リーグ監督」の条件(本規則第17条、監督資格)を満たす者(リーグ監)に選ばれること。 監督は「リーグ監督」の条件(本規則第17条、監督資格)を満たす者(リーグ監)に選ばれること。 監督は「リーグ監督」の条件(本規則第17条、監督資格)を満たす者(リーグ監)に選ばれること。		審判はスコア板審理権限を有していること	
11) 参加プレー		各チームはスコア板審理権限を有していること	
12) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
13) 参加プレー		各チームはスコア板審理権限を有していること	
14) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
15) 参加プレー		各チームはスコア板審理権限を有していること	
16) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
17) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
18) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
19) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
20) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
21) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
22) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
23) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
24) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
25) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
26) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
27) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
28) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
29) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
30) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
31) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
32) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
33) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
34) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
35) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
36) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
37) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
38) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
39) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
40) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
41) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
42) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
43) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
44) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
45) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
46) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
47) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
48) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
49) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
50) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
51) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
52) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
53) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
54) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
55) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
56) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
57) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
58) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
59) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
60) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
61) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
62) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
63) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
64) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
65) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
66) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
67) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
68) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
69) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
70) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
71) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
72) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
73) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
74) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
75) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
76) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
77) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
78) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
79) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
80) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
81) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
82) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
83) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
84) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
85) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
86) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
87) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
88) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
89) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
90) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
91) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
92) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
93) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
94) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
95) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
96) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
97) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
98) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
99) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
100) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
101) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
102) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
103) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
104) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
105) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
106) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
107) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
108) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
109) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
110) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
111) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
112) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
113) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
114) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
115) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
116) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
117) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
118) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
119) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
120) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
121) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
122) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
123) 参加チーム		各チームはスコア板審理権限を有していること	
124) 参加			

っても長続きするクラブとして関わってもらうようなかたちを構想していました。「チームとクラブ」の考え方などを、構想段階では伝えたつもりでした。けど、リーグが整備される大きな動きに取り残されまいとする多くの指導者は、学校の部活動のまま参加しようとします。当初の構想から少しづつ妥協せざるを得なかつたというのもあります。

2004年度から都内全域で3部構造のリーグをスタートする総会を2月に開きました。しかし3月に突然の中止。運営上の課題はありましたが、それ以上に公教育の壁です。リーグ戦に引率する教員はどういう身分で帯同するのか、学校のグラウンドをサッカーチームばかりが使うことにならないか、生徒の過重負担にならないか、災害共済給付は受けられるのかといったことです。このあたりはクリアしたうえでの開催なのですが、「サッカーチームからこういうのが上がってきたんだけど、どう扱えばよいのでしょうか」と、都立高校の校長から教育委員会への問い合わせがあり、結果的に2004年度は中止ということになってしまいました。

富山県では問題なくできたんですよね。

佐伯：その連絡を聞いて「東京は大変ですね」って言ったのを覚えています。富山では校長先生たちに関心がなかったのでしょうか、何ともいい地域です。2004年に富山では普通に開催できました。知らない、知られていないって本当にラッキーですね。東京は大変だなっていうのはありましたね。

私はこの一件で東京都公認リーグのプロジェクトから外れることになりましたが、後輩たちがいろいろ動いてくれて、下から上まで全部つながりました。

我々が想定していたU-18のトップリーグは9地域リーグまでですが、JFAはもっと張り切って、いまでは東日本と西日本でプレミアリーグをやっています。

けどね、形は整ったけど、肝心の遊び心やゆとりが失われ、学校の先生ですべてやろうとすると回らない現状があります。最初からわかっていたことなんです。

**U-18東京都リーグ  
突然の中止(2004.3.7.)**

**■公教育の壁(特に都立高校)**

- 1)教員の服務
- 2)高校グラウンドの使用
- 3)生徒の参加

(災害共済給付が受けられるか)

**■運営上の課題**

「公認化」にともなう煩雑な事務手続が処理できるのか

**何のため、誰のためのリーグ戦？**  
「学校のため」ではない！  
(部活動の活性化は副産物)  
「今の、そして将来のプレーヤー(生徒)のため」である！

U-18東京都サッカーリーグ突然の中止の概要

件名：都立高校サッカーリーグ突然の中止にご理解とご協力を賜りありがとうございます。

さて、実戦開催困難の申立ての連絡を都教育局へ上げます。平素は多岐に亘るご理解とご協力を賜りありがとうございます。

さて、実戦開催困難の申立ての連絡を都教育局へ上げます。多くの都立高校が長い間ようやく決まりました。都議会につきましてはご都内の通り日月12月に都議会議院において開催されました。新規引きかかれた都立高校がこれまでありましたので、改めてしてご説明をさせていただきます。

1. 平素より頂いた御質問

1)都立高校教員の報酬について  
高体連主導でない連携会への新規は都立高校のより高い報酬や報酬にならぬか。

2) 分担競技

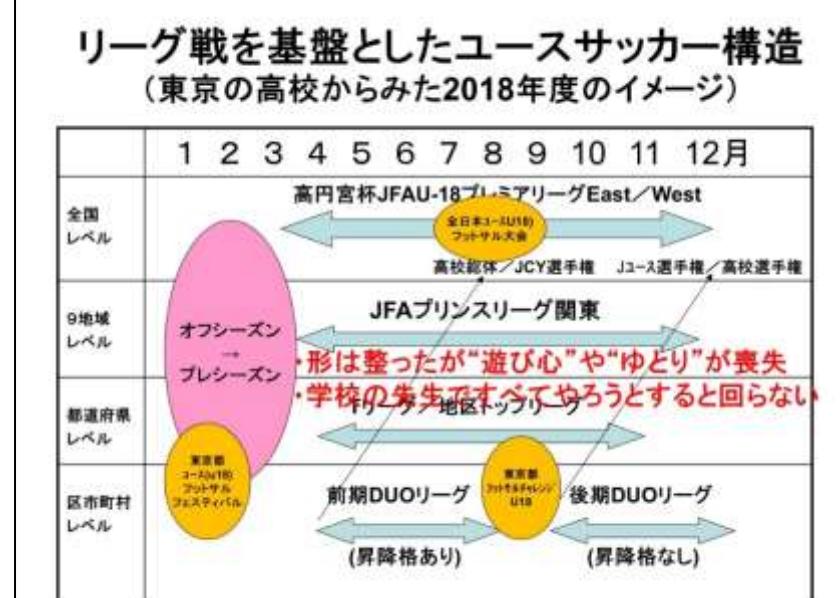
都立高校連携である《財》東京都サッカーリーグが主導する競技会の合併問題についてどのように手綱きが必要になるか。

3) (都立行政法人)日本ユースフットサルセンター協賛料

本競技会一部実施する場合に都立高校は(都立行政法人)日本ユースフットサルセンター協賛料を支払うべき共済給付金の財源に充てらるか。充てらるるためにはどのような手綱きが必要か。

4. 今後の意向

現行の高体連委員会は今回の申立てにより解散し、成年後(18)都立高校サッカーリーグより都立高校教員に委託がされた場合、都立高校サッカーリーグで都議会議院が開催し、都立行政法人は(都立行政法人)日本ユースフットサルセンター協賛料へ充てらるか。充てらるるためにはどのような手綱きが必要か。



**DUOリーグのいま**

- “理念”は徐々に実現されつつある  
→リーグ戦は「当たり前」(ただしクラブ間で温度差あり)
- 学校教育としての限界が見えつつある  
→学校の先生だけでサッカーをささえるのは「無理」  
→卒業生や地域との連携が不可欠
- 互いの顔が見えなくなりつつある  
→飲み会減(メール増)／新旧メンバーに意識のずれ
- “公認化”をめぐる功罪が見え隠れする  
→JFAの方針によってリーグ環境は整備されたが、  
「上に合わせよう」「きちんとやろう」の意識が強まり、  
**“遊び心(スポーツマインド)”が  
失われてきた…**

「DUOリーグのいま」のスライドは2007年ごろの話です。「上に合わせよう」「きちんとやろう」の意識が強まり、“遊び心（スポーツマインド）”が失われてきたと感じるようになりました。

そんなころ、「DUOリーグのトロフィーがない！」という間抜けな出来事がありました。これはかなりおもしろい話なのですが、時間がないので詳しくは述べません。「トロフィーがない！プロジェクト」をアーティストの土谷さん、いまはNPOサロン2002の理事をもらっていますが、彼らアーティスト軍団と相談して「履けなくなったサッカーシューズでできた履けるトロフィー」を、DUOリーガー全員で作ったというプロジェクトです。「12年間使おう」「12年たったらまたつくろう」と言っていましたが、いまの人たちはこういうことを考える余裕がありません。

そろそろラストになってきます。

DUOリーグを立ち上げ、いろいろやっていた頃、日本サッカー協会機関紙JFAnewsに「ユース年代のサッカーはいま！」という連載を持つ機会がありました。約30年前の構想ですが、私はサッカーだけで盛り上がりうと思っていたわけではありません。いろんなスポーツでリーグ環境が整備されればよい。リーグ期間がシーズンなので、シーズンごとに取り組むスポーツを変えればいい。そうなれば、例えばサッカータレントのA君は1年中サッカーができるし、普通のスポーツ好きのB君は、1学期はバスケ、2学期はサッカー、3学期はオフシーズンとプレシーズン。富山だったらスキーをする…。

先ほども「選択肢」という話がありましたけど、リーグ構想を打ち出したころは、このようないくつあるスポーツ環境を考えていました。けどどうしても競技団体マターになると、「年間を通してサッ

カができるように」となるわけです。

リーグ(戦)は“組織”です。特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たち自身で自分たちの活動をささえる—自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

リーグ戦は“生活”です。平日のトレーニングと週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成しリーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦」を行うことではありません。リーグ期間をどこへ持っていくかは大きな課題です。

地域ごとの事情もあるでしょう。いま橘さんが、富山県のU-18サッカーとフットサルの両方に関わりながらこの問題に直面されていると思います。

そしてリーグ戦は“遊び”です。自然に、ちゃんと、本気で、徹底的、定期的に遊ぶ仕組みがリーグ戦です。言わされたから「総当たり戦」を行うのではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

ということで、スポーツはそもそも遊び。遊び心を取り戻せ。本気の遊びが、人を育て、社会を育てるということです。

主にサッカーの話が中心になりましたが、他のスポーツ、あるいは芸術などの文化活動も含めて同じことが言えるのではないかと思います。

部活動改革がきっかけにはなっていますが、地域社会で青少年をいかに育てるかということにもつながってくると思います。

## ユース年代にリーグ戦を！

### 1. リーグ(戦)は“組織”である

特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たち自身で自分たちの活動をささえる—自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

### 2. リーグ戦は“生活”である

平日のトレーニング週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこへ持っていくかは大きな課題です。地域ごとの事情もあるでしょう。

### 3. リーグ戦は“遊び”である

“あそぶ”的な前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に“あそぶ”仕組みがリーグ戦です。言わされたから「総当たり戦を行う」のではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

## スポーツはそもそも“遊び” “遊び心”を取り戻せ！

### 本気の“遊び”が 人を育て 社会を育てる

#### サロン2002ファミリー募集中！

「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”に掲げるネットワークです。

年度単位の会員制組織で、  
年会費は4,000円。学生は2,000円です。  
いかがですか？



## <ディスカッション②>

佐伯：ありがとうございました。中塚さんからは、スポーツは遊びであるというところから、生徒主体で遊び方を工夫して徹底的に遊ぶこと、高校生の部活動ならではのやり方だと思いました。いまの話を聞いて、ご意見やご感想をどんどん出してもらえばいいかなと思います。

土田：私は柔道を教えていますが、道場の壁にすごくたくさんの方の名前が、段位とともに掲げられています。けどその方々のほとんどは道場に来たことがありません。一部だけです。

そもそも高校の部活動って競技だけじゃないですか。大会に出る、勝たなきゃいけないという競技

目的で練習を毎日していたけど、その先にある生涯スポーツ、生涯文化や生涯アートに関しては教育されてないんじゃないかな。先生方は「生涯にわたって大事だよ」とおっしゃってくださると思いますけど、子どもは次の試合のことしかない。この前は負けた。次の試合まで少ししかない。戦わないといけない。練習もあるし体力つけなきゃと。

娘がいま中3で、先日全国大会予選があり、準優勝だったので全国大会には行けなかつたんですけど、それに向けて自分で計画を立ててよくやっていました。この試合に勝たなきゃもう自分ダメやという感じで。競技だけです。高校行つても柔道をやるつもりですけど、「高校を卒業してもあなた柔道するの」と聞いたら、「そこで終わり」って言つうんです。「でもほら、趣味としてとか、下級生たちに教えるとか、そういうことを考えてないの」と聞いたら、「ない。高校卒業したら自分の好きなことをやる」って言つうんです。「好きなことは柔道じゃないの」と言つたら、「いや、違う。いまは柔道部に入つてるし小さい時からやつてます。学生時代は柔道しかやることないから柔道をやるけど、そこから先は自分のしたいことやるから柔道はやらない」って。

私はいま50代で、40代から柔道を始めるまでは柔道は知らなかつたんです。40代から始めてすごく楽しいなと思っています。競技もやりましたけど、競技以外でも、柔道をやることによって同年代の友達ができたり目標ができたり。健康のためにも柔道をずっと続けていけるようにがんばろうと、楽しい中にもいろんな目標ができるんです。そういうものが高校生にはないんじゃないかな。目先の試合のためだけ。いまはやらなきゃいけないものだからやつてますけど、学校を卒業したら解放してほしい、もうこんなことやりたくないという人が多いように思います。

私たちがいくら生涯スポーツと言つても、彼らの頭の中には目先のことしかないので、そこまで考えられない。何で生涯を通してこんなきついことやらなきゃいけないのっていう考え方が多いと思います。高校時代から生涯スポーツについての教育をもっとしていかなきゃいけないと思います。

佐伯：引退みたいなものが作用してくる社会風習が日本には多いと思うんです。先ほど宮城島さんが言つた、日本では一つのことだけに打ち込まなきゃいけないという感覚ですね。途中でやめますというのはダメのように受け取られます。しかも学校教育の中だと、評価や、推薦するしないにまで影響する。土田さんの娘さんが柔道をやめた後、次のことだけに打ち込むのかはわかりませんけど、自分で思い切つてシャットアウトして、次に何か他のことをするというのもあります。そういうのも遊び方の1つなのかもしれません。学校の中で引退はないんだということを教育できているかというと、なかなかそういう雰囲気にはならない。テレビや新聞はそこを美学として取り上げるところがあるってどうなんだろうって思いますね。

嶋崎：私は学校の部活動から競技志向のものを一切なくした方がいいと思っています。学校でやるスポーツは、あくまでもレクリエーションで週2～3回程度、みんなで楽しくやる。それも、1つの種目じゃなくてシーズン制にするなりして複数の種目をやっていく。

では競技をやりたい人はどこへ行けばいいのかというと、それが学外のクラブです。そういう志を持った人たちが集つたところ、レベルの高いところでやつた方がいいと思います。1時間半ぐらい学校の中で楽しくやるのであれば、勝ち負けも関係ないのであれば、学校の先生たちも十分支えていいと思うんです。それも1つの競技をやるわけじゃなければ、いろんな先生が関わりながら少しづつ面倒を見つけていけるはずです。いまの部活動の良さは、部活動を通して生徒と先生たちがうまく関係を持っていくところにあると思います。まずは競技志向の活動を学校から排除していくことが最初なのかなと考えています。

ネックになるのは中体連という組織ではないでしょうか。いまのままの組織であるなら解体してもらおう。言い方は悪いんですけど、考え方を変えてもらい、大会屋さんじゃない団体になっていただかないと難しいと思います。中学校はそれでいいと思います。

ただ高校は、一部私学において、私が勤めていた学校もそうでしたが、やっぱりスポーツをやることによって生徒を集めている学校もあります。私学については生徒が選べばいいわけです。高校ではある程度、競技志向の部活動を残してもいいのかなと思いますが、少なくとも中学校、あるいは公立学校では、競技志向の部活動はやめた方がいいというのが私の意見です。

宮城島：いまの話で、国の考えがなんとなくわかる法改正があったのでそれを紹介しておきます。これを材料に議論いただけたらと思います。チャットで送ります。

（中学校の生徒が継続的にスポーツに親しむ機会の確保）

第十七条の二 地方公共団体は、中学校の生徒の数の減少及びこれに伴う中学校の部活動の実施に係る状況を踏まえ、中学校の生徒が継続的に多様なスポーツに親しむことができるよう、地域の実情に応じて、学校、住民が主体的に運営するスポーツ団体（「地域スポーツクラブ」）その他の団体との緊密な連携の下に、中学校の生徒が地域においてスポーツに親しむ機会を確保するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。

（中略）

（高等学校の生徒のスポーツの推進）

第十七条の三 国、地方公共団体及びスポーツ団体は、高等学校の生徒のスポーツが人格の形成及びスポーツの普及のみならず、競技水準の向上の基盤の強化等においても重要な役割を果たすことに鑑み、相互に連携を図りながら、高等学校の生徒のスポーツの推進に必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

6月にスポーツ基本法が改正され、17条の二と三が新たに追加されました。17条の二が中学校の話で17条の三が高校の話になっています。中学と高校で文章がだいぶ違います。

まず見出しを見ていただくと、中学校の方は、「中学校の生徒が継続的にスポーツに親しむ機会の確保」となっており、どちらかというと生涯スポーツ的なことを進めましょうと言っているのだと思います。高校の方は「スポーツの推進」となっています。中身を見ていくと、中学の方は見出しの通りで、「部活動の実施に係る状況を踏まえ、中学校の生徒が継続的に多様なスポーツに親しむことができるよう、地域の実情に応じて、学校、住民が主体的に運営するスポーツ団体（「地域スポーツクラブ」）その他の団体との連携の下に、中学校の生徒が地域においてスポーツに親しむ機会を確保するために必要な施策を講ずるよう努めなくてはならない」となっています。この主語は各自治体です。だから県とか市が講じるという内容になっています。

中学校の部活動改革がどういう方向に進むかはこの文章でわかると思うんですけど、今日のテーマの高校の方がちょっと厄介なんです。「高等学校の生徒のスポーツが、人格の形成及びスポーツの普及のみならず、競技水準の向上の基盤の強化等においても重要な役割を果たすことによる鑑み、相互に連携を図りながら、高等学校の生徒のスポーツの推進に必要な措置を講ずるよう努めなければならない」となっています。国と自治体とスポーツ団体が連携を図りながら「スポーツの推進」というのだから、生涯スポーツだけを言っているのではなく、競技力向上も含んで曖昧に書かれていると思います。

ですので、この文脈だと学校の部活動で競技力の推進をやりなさいとまでは書いていないけど、そこは国が担うわけがないので、自治体、要は教育行政とスポーツ団体が連携しながら努めなきゃならないよと読み取れます。高校においては生涯スポーツだけじゃなくて競技力向上にも関わるんだと言っているような気がします。

つい最近見たばかりで詳しい背景は知りませんが、ここまでご紹介をし、意見交換させてもらえばと思います。

佐伯：宮城島さんが言われた通り、高校の場合、公立や私学において環境の違いがあつていいんじゃないかと。スポーツ基本法から見ても、曖昧というか積極的思考なのかよくわからないんですけど、国や地方公共団体、スポーツ団体の取り組み方も多様でいいというか、高校生ぐらいからは体も出来上がり、いろんな選択が可能になっていく。精神的にも可能になるというのもあるかもしれません。

嶋崎：高校においても中学校においても、競技志向でないものに変えるのであれば「引退」はなくなりますよね。引退なしで3年間ずっとやっていける。少子化で生徒が少ない中学校がたくさんあります。全校で百人いるかいないかぐらいの。それならば、地域の大人たちも卒業後、学生たちと一緒に学校の施設を使ってスポーツをすればいいと思います。極端に言えば、小学生が来て一緒にやってもいいかもしれないし大人も一緒にやってもいい。それなりに楽しく、みんなでスポーツができる場が確保できる。子どもの数が減って、「やる生徒がいないんです」ということはなくなると思います。

競技志向を脇によければ、いろいろな可能性が広がるを考えます。だから、中学校は必ずそうすべきだと思います。高校は学校を選択できるので、いろんな学校があっていいと思うんです。競技志向を排除した学校があれば、引退なしで地域の人も一緒になってやっていくことも可能だと考えます。

長野：私の専門はスポーツではなく音楽なので、その立場から申し上げます。先ほどの中塚先生のスライドで、スポーツはそもそも遊びってありますが、日本語の遊びって、いまから千年ぐらい遡ると、ほとんどは管絃の遊びなんです。管絃、雅楽。平安時代に出てくる文章で遊びと言ったらほとんどはこういうことです。実際にどんなことをしていたのかは、音楽って録音技術がないと残りませんから何をしていたかわかりませんけど、日本人は本来、遊ぶという文化は音楽で遊ぶということが平安時代、もしかするともっと前から、お酒の席で歌ったり、音楽に合わせて踊ったりして遊ぶというニュアンスでの遊びがあります。

1000年以上前から日本人には音楽を使って遊ぶという概念があるんですけども、いまの中学・高校の部活動にそういうポリシーはあるのでしょうか。ここはおそらくスポーツと同じ問いかけになると思いました。

佐伯：私も2ヶ月前に初めてアマチュアの音楽イベント、富山市役所にお勤めの方に合唱イベントに誘われました。初めて聞いて、オーケストラというかハーモニーの調和は、サッカーの試合でのチームワークと全く一緒だなど。より積極的に遊んでいるシーンに見えたというのがあって、招待してくださった方に「スポーツと音楽は全く一緒ですね」と。facebookにも書かせていただきました。アマチュアの大人の人たちがみんなで楽しそうに歌い、楽器を演奏するところは、サッカーの楽しいゲーム中と全く一緒だなと思いました。

長野：アスリート的なところがあつていいかもしれませんけど、「吹奏楽の遊び」とかがあつてもいいのかなと思いました。

内田：まず中塚先生の今回の話の中で、チームとクラブの違い、お互いリスペクトするのがクラブワークだというところが非常に勉強になりました。我々はいまクラブづくりをしています。中学校の話になってしまいますけど、参考というか、現場のリアルな話を、問題提起も兼ねて共有させていただければと思います。

まず、新たな価値の創出と中塚先生がおっしゃったように、やっぱりここを地域とどうやって一緒にやっていくか、地域クラブと学校の連携が非常に求められていると感じています。実際のところ地域クラブの定義は全く決まっておりません。先ほど、部活はFUNで、地域クラブはプロに任せる方がいいという話がありました。しかし地域クラブの中にも、みんなでスポーツを楽しもうというクラブと

プロになろうというクラブの二つがあります。そうなると、新たな価値を創出するには人数が必要になってくるので、どうしてもみんなでやるFUNのクラブに結局なってしまうんです。私たちはいま、みんなでやるFUNの方針で女子サッカーをしていますけど、野球をしている女の子やバドミントンの部活の子たちが、部活のない日に我々の女子サッカークラブに参加されているんです。ここでの問題点は、結局みんながやりたいのはゲームなんです。みんなで楽しくボールを使ってサッカーの練習をするよりも、最終的にはゲームをやって勝ち負けを決める。すると我々は、FUNを目指せばいいのか競技性を求めるのがいいのか。ここが我々クラブ運営側のジレンマというか、方向性が決まっていないところです。各学校のニーズをそれぞれ聞いて、地域に見合ったクラブを作っていくべきなのか。私たちがもっと学校側と連携していきたいと思っているところです。

例えば富山中部高校の橋先生は、この地域ではプロを目指す生徒が多いのでプロの地域クラブを求めるとか、何かニーズがあったりするのでしょうか。おそらく東京とは状況が全く違うと思うので。

橋：プロかどうかで言えば、サッカーの事例になりますが、富山にはJ2のカーティ富山のユースチームがあります。本校にもそこでサッカーをやっている子が1年生から3年生までで4人在籍しています。彼らは学校の部活動ではなく、そちらの活動に参加しています。本校のサッカー部に入ってくる子たちには、基本的には競技志向であってほしいというのが部としての考え方ですが、そこに合わない子たちは途中でドロップアウトしていくのが悩みです。中塚先生がおっしゃられる、FUNの子たちもいられるような空間や制度づくりをしたいなと思いつつ、全体が動くところの責任が教員にあるので。そこを作り出すための人手が足りない、認めてもらうためのバックグラウンドが足りないと。遊んでるくらいだったら、価値がないから勉強しようというふうに言ってしまうのかなと。

先ほど宮城島さんが言ってくださった人格形成ということが、一所懸命やることで磨かれる人格形成しか教育の中では認められていないところがあると思います。他の子と関わり協働していく中で育まれる非認知的能力が、集団でいる中で磨かれてていきます。そういうことに価値があるということを、指導者、顧問の側が理解していけば、「君たちはいまこういう力を伸ばしてるんだよ」というのをしっかりと指導できると思います。だからやめないで頑張って続けよう。どうしても辛いのであれば違うところに行ってもいいんだよ、こちらとしては君のことをサポートするし尊重するよと言ってあげられるような顧問であることが大事だとは思っています。実際僕のところで、つらいのでやめますという生徒が年に1人ずつは出ています。けど、やめても君はうちの高校の生徒だし、君が次に選択することを応援するからね。ただし、やめてしまってやる気なく無気力で過ごしてるんだったら声かけるからねということを言っています。

ただどちらかというと、やめていった子の多くが、どうしても無気力側になっていくのを見てきました。どうすればいいのか、そこは自分の中で蓄積中ですね。

土田：私は東京で3年間生活していたことがあって、保護者が外部指導員にならなきゃいけない時があったんです。子どもたちは講道館でずっと柔道をさせていて、私も柔道を講道館の女子部でやっていました。その時に先生から言わされたのが、これからはお母さんが練習場所を探さないといけないよということです。その中学校だったらこの道場がありますと案内をしていただき、そこに問い合わせして出稽古に行かせてくださいというのを「お母さんが自由にやってください」と言われていました。講道館に近い春日柔道クラブに所属して、そこでずっと練習や試合をしていましたが、中学校の大会に出るときは学校の名前で出ていました。私がいろんなところに電話して出稽古に行かせてもらい、いろんなところに行っていろんな人と会って、時には中学だけじゃなくて高校にも行かせてもらい、先生にお願いして練習させてもらっていました。東京にいた時は出稽古が自由にできたんです。

それが富山に帰ってきてみると、出稽古に行ってきますと監督に言うと、「ちょっと待って」と言わされたんです。誰に許可とったんですか、相手校の先生の許可はとりましたかと。もちろん取ったんで

すか、保険の関係上、あまり行ってほしくないのか、こういう場所があるんだからよそに行く必要ないじゃないですかと言われました。東京にいたころは自由にできたことが、富山に帰ってくると監督の意見が一番で、その人に行かせてくださいと言っても許可がもらえないといけない。東京と地方ではそういう隔たりがあって、いろんな人の出会いの場がなくなるのはとても悲しいと思います。

佐伯：橘さん、内田さん、土田さんの話を聞いて、中塚さんも言われた遊びということ、スポーツとは何ぞやということが、選手にも指導者にも、親にも伝わっていないと思うんです。僕も雄峰高校定期制の4月の授業で毎年、スポーツとは何かとか、体育とは違うのだという話をします。「そんな話、小学校や中学校の指導者からは一度も聞いたことはありません」と、生徒たち全員が言います。スポーツは遊びであり晴らし。非日常空間に行くところなのだ。だからいま君が体育館に来たということは、普段のことは全部忘れて50分間遊びきって帰る場所だよと言って、「いや、体育なんでしょう」みたいな感じがあります。スポーツとは何かというのを聞いたことが一度もないというところをみんなで改めて共通認識を持って進めていかないといけないですね。

『スポーツマンシップを考える』でしたっけ。廣瀬一郎さんが書いた本の中に、勝敗がつくゲームに負けていいものはない。ゲーム=競技でも遊びでも何でもない、必死にやるだけです。ババ抜きやっていて、負けてあげるからババちょうどいと言わせて勝ったって嬉しいでしょ。

やっぱり必死になってやるのが、レクリエーションレベルであれ日本代表レベルであれ、ゲームとなったら負けないように楽しむのがゲームです。遊びに競技性もレクリエーション性も本来ないのだろうと思います。我々が区別するんじゃなくて、やっている本人がどう思っているかだけの話なので。ここは競技だ、ここはレクだという必要もなく、ゲームが始まったら負けないように楽しもうとしか言いようがない。

かつて日本のサッカーがブラジルにまったく勝てなかつたのは、必死になって勝とうとする日本と、サッカーの試合中に遊びの要素をたっぷり入れているブラジル人には絶対ゲームで勝てないというのになるほどなと思ったことがあります。スポーツって何かというのは、いろんなところで広めていきたいなと思います。

中塚：少し油断していると、これまでの考え方に戻ってしまいます。例えば38年間「引退なし」を言い続けてきたけど、気がつくと生徒たちは「引退」という言葉を使っています。ただうちの女子部はおもしろくて、「引退っていう言葉を使っちゃいけないみたいだ」となると、「隠居」という言葉を探してきました。言葉遊びをしているのでいいなと思っています。

活動の一区切りはあっていいし、学校スポーツだったら代替わりがあっていいのですが、「引退」は抹消したい概念ですね。

それからいま佐伯さんが言われたことでいうと、勝敗に対する向き合い方ですよね。サッカーでもじやんけんでも、何でもそうだけど、勝負事には「絶対勝つ」というつもりで臨んで、ちゃんとやってほしい。勝つときもあれば負けるときもある。それはただの遊び空間の中でのできごとなんだから、日常には引きずらない。勝ったから偉いわけではないし、負けたから人間性が否定されるわけでもない。「グッドルーザー」という言葉の意味すらわからない指導者が、残念ながらいっぱいいると思うんです。負けるのは悪いことだみたいな。そうじゃないんです。これも引退なしと同じです。勝ったり負けたりするんだから、それを素直に受け入れましょうということです。そういう文化というか、教育なのかもしれないけど、いろんな場面でやっていかないといけないですね。

別の側面ですが、特にいまどきの青少年をみていると、勝っているのに喜ばない、あるいはサッカーやって遊んでるときに、あいまいなまま遊びが進められる姿が見られます。例えばコーンを2本立ててゴールにして遊んでいる。その上の高いところをボールが通過したのはゴールなのかゴールでないのか。点の取りっここの「ごっこ遊び」をしているのだから、点が入ったかどうかは一番大事なところ

です。しかし、一方のチームは点が入ったと思い、もう一方のチームはいまの入ってないよと言いつながら、結論を出さずに曖昧にゲームを続けてしまう。体育の授業でもよくあるケースです。ゲーム後に何対何でどちらが勝ったのかを尋ねると、同じ遊びをしているのに点数が違うわけです。「どういう遊び方してんねん?!」ということです。そんな遊び方はダメです。体育の授業でも「ちゃんと遊ぶ」ことを学ばせないといけないし、そこには勝ち負けにこだわることは含まれます。だからといって、結果を日常に引きずらないことももちろん大事。ゲームが終わったらノーサイドなんです。それとワンセットになるということを言い続けないとダメだと思うんですね。

勝利を求める主義がダメなんじゃなくて、勝利至上主義がダメなんです。

石黒：中塚さんの話がすごいそうだなと思いました。競技志向かどうかは本来分離できないと思います。究極に遊べるようになったら、たぶん勝つと思うんですよね。今日の話を聞いていて思ったのは、指導者がスポーツとか競技とかに対してどういう意識でいるのかということが子どもたちに大きく影響するということです。

佐伯：体育の授業でもちょっとした遊び方の設定を変えて楽しむことができるはずです。大人が設定しなきゃいけないかもしれないけど、中塚さんの高校のように、自分たちだけで相談して設定していくのも、高校生ぐらいならできるんだろうなと思います。

静岡でもこのテーマは続きますよね。

中塚：その話でいいですか。今日はそろそろお時間なので。次回は静岡市清水区の中学サッカーの話が中心になっていくと思います。宮城島さんから次回の予告、今日の話の中でどの部分を引き取れそうなのかというところ、あとは今日のまとめというか感想をいただければと思います。

宮城島：まとめは無理ですけど、有意義な時間をありがとうございました。大変参考になりました。特に中学と高校の部活動の対比は、連続もしているので非常に重要なと思っていて、それが整理されていくきっかけになったのは良かったと思います。

次回の清水での会は中学の事例で、清水の取り組みを発表させていただきます。中塚先生にはまた同じような内容で、前半部分をもう一回やっていただく方がいいかなと、聞きながら思いました。

来月もぜひ清水にお越しいただき、ご参加いただけするとありがたいと思います。

清水がサッカーどころになった理由は、小学生年代のサッカーの普及がベースになっています。最初に始めたのは小学校の教員です。しかし組織的には最初から学校から外して社会体育でやりました。施設は学校を使うんだけど、仕組みは学校を使わずに社会体育で最初から、昭和30年代からやりだしたところが、サッカーどころにつながる根っこかなと思います。

相対的にはもうサッカーどころとは言えなくなっているかもしれませんけど、そのあたりの歴史はいまも連綿と流れている話になると思います。ぜひご参加いただき、意見交換できたらいいかなと思います。よろしくお願ひします。

佐伯：実は定時制のサッカーの全国大会は、ずっと清水でやらせてもらっています。東京で泊まるとき宿泊費は1泊12,000円から15,000円ぐらいに上がりましたが、清水の旅館組合は据え置きで、1万円からずつに泊まらせてもらったりしています。本当にサッカーどころなんだというのを、定時制の子どもたちは実感して帰っています。定時制は男女一緒に、上手い下手も関係なく同じチームで出ているのもあって、スポーツの原点を見ているというような気も、地域との一体感も含めて、しています。

宮城島：実は昨年のその大会で、私は担当の課長をしていたので開会式でご挨拶をさせていただきま

した。近所に住んでるもんですから、何試合か見に行かせてもらって、生涯スポーツ的な、みんな楽しくかつ一所懸命やっているいい大会だと思います。

佐伯：ぜひ今後とも清水で開催していただければと思いますので、よろしくお願ひします。

変な結びになってごめんなさい。ありがとうございました。

今日ご参加いただきました嶋崎さん、長野さん、内田さん、ここにいらっしゃる土田さん、石黒さん、本当に今日はありがとうございました。中塚さんとも話しましたが、これで終わるのでなく、これを皮切りにこういう話し合いを継続して、いっしょに考える人を増やしましょう。国の施策にお任せしていると、先ほどの話にあったように元に戻ってしまう可能性もあります。また改めて皆さんと顔を合わせられたらと思います。

今日はありがとうございました。

以上

(続きは近所の居酒屋で)